

総合都市研究 第52号 1994

東京都立大学都市研究センター
第6回公開講演会

環境と対話する都市
— 都市環境問題の新しい視点 —

1993年10月6日

於 東京都議会議事堂都民ホール

1. 開会あいさつ
2. パラダイム・シフト「環境にやさしい都市」から「環境と対話する都市」へ
3. 都市に生きる
4. 地球環境保全と環境政策

挨拶：石田 頼房*
講演：萩原 清子*
川口 士郎**
福岡 克也***
司会：中林 一樹*

1. 開会あいさつ

【石田】 東京都立大学の都市研究センターの所長をしております石田でございます。きょうは、都市研究センターの第6回の公開講演会にお集まりいただきまして、大変ありがとうございます。この公開講演会は毎年秋に、都市研究センターの主催でやっておりますけれども、今回は都市環境問題を取り上げて開催することにいたしました。大変たくさんの方から申し込みをいただきまして、530人を超えるお申し込みをいただきました。この施設が280何人という定員でございますので、

申しわけありませんけれども、かなりの方をお断りしたような次第でございます。特に都庁の関係、区市町村関係の方をお断りいたしました。大変申しわけなく思っております。

本日のテーマは、都市環境問題ということで、「環境と対話する都市」というテーマを掲げてございます。皆さんのお手元にあります緑色のリーフレットに開催の趣旨が書いてございますけれども、環境問題が次第に変化をしていく中で、都市環境問題を新たな視点で見直してみようということ、ここでは「環境問題が公害型から環境創造型、さらに地球環境型へと大きく変化している」と書いてございますけれども、そういう変化の中で、今

*東京都立大学都市研究センター

**東京都立大学工学部

***立正大学経済学部

後都市環境を考えていく視点をきちんと見きわめてみたいというのが今回の趣旨でございます。

私は、専門が都市計画ですけれども、都市計画の観点から都市環境問題を考えてみますと、明治時代ですと、都市の発展・市街地の形成に公共投資が間に合わないという形の環境問題が非常に顕著でありました。例えば、明治時代、下水道の普及が非常におくれました。そのために伝染病が蔓延し、その防止ということが、非常に大きな都市環境問題として課題になっていたわけです。その後、特に戦後、公共投資を非常に頑張っている中で、むしろ大規模な公共投資がかえって環境問題を引き起こすというような事態になっていったと思います。例えば、大きな道路ができて、自動車の交通量がふえて、それに伴う空気の汚染とか騒音・振動といったような問題が起こって、都市環境を破壊するということがありましたし、あるいは大規模な埋め立てが行なわれ、自然の海岸線がどんどんなくなって行って、市民と自然の海との接触を断ち切ってしまいました。そういうように、大規模な公共投資が行なわれた結果、あるいはそれが十分な環境的な配慮なしに行なわれた結果、環境問題が激しくなるというような事態が起こった時代があります。

最近の環境問題で私が感ずることは、むしろ豊かな生活を追求する、あるいは効率的な都市活動を追求するということが、環境問題にはね返ってきているということがあるように思います。例えば、電気を一つとってみても、あらゆる生活が電気によって動かされ、大変便利に動いているわけですけれども、電気自体はクリーンエネルギーかもしれませんが、その電気をつくるための環境への影響という問題を引き起こしてくる。あるいは、大変自動車が増え便利になりまして、ほとんどこの家でも1台、あるいは2台という車があり、さらに最近ではアウトドアライフというようなことが言われて、自然に接する活動というのが非常に皆さんの関心を呼んでいるわけですけれども、そういうアウトドアライフのための車、それが4WDのディーゼルエンジンつきのレジャービークルという、そういうものが普及して、それが交通によ

る環境破壊の問題とか、大気汚染の問題とか、あるいは大変便利に自然環境の中に行けるために自然環境に対する影響が非常に大きくなってきているなど、こういう問題が起こっております。要するに、現在では我々の生活の目標とか、あるいは計画が取り上げる豊かな生活像ということ自体を少し考え直してみないと、環境問題を解かかぎが見つかってこない、そういうような事態になってきているように思います。

そういう意味で、環境問題は非常に大きな変化を遂げてきて、今や地球環境問題のような非常に大きな課題になってきております。きょうは、3人の講師によって、この都市環境問題の新しい視点を3つの角度から追求してみたいというのが、企画の趣旨でございます。3人の講師は、お話をする順番で申し上げますと、私ども都市研究センターの都市システム・経済部門の萩原清子教授、それから本学の工学部土木工学科の川口士郎教授、それから立正大学の経済学部長で地球環境財団の理事もなさっていらっしゃる福岡克也教授、このお3人です。ぜひ、最後までお聞きをいただいて、環境問題に関する新しい視点を皆さん方がつかむのに何がしかお役に立てればと思っております。

最後にちょっと、私どもの都市研究センターのことを申し上げておきますと、都市研究センターは都立大学の附置研究所でありまして、現在、6人の専任スタッフがおりました、来年の4月にはさらに2人ふえまして8人の、多くの分野の都市に関する専門家を集めて、ユニークな都市研究所として発展させていきたいというふうに考えております。さらに、川口先生のような、都市研究センターの専任ではございませんけれども、全学の都市研究者、あるいは学外の都市研究者も参加していただいて共同研究を進めております。

さらに、来年の4月には、この都市研究センターを基礎に、都市科学研究科という大学院研究科を開設したいと考えておりまして、現在文部省に設置の申請をする準備を進めております。都市研究センターと都市科学研究科について、簡単に紹介した資料を受付のところに用意してございますので、ご関心のおありの方はお帰りにお持ちいた

ければというふうに思っております。

それでは、これから「環境と対話する都市—都市環境問題の新しい視点—」というテーマで公開講演会を始めたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

2. パラダイム・シフト「環境にやさしい都市」から「環境と対話する都市」へ

【司会】 それでは、最初に「パラダイム・シフト「環境にやさしい都市」から「環境と対話する都市」へ」と題しまして、都立大学都市研究センター教授の萩原清子先生にお願いいたしたいと思っております。

【萩原】 ただいまご紹介いただきました萩原でございます。きょう、この会場にお集まりの方々、もう既に環境問題にかなりの関心をお持ちで、多くのことをご存じの方ばかりだと思います。そういう方々を前にして、きょうお話をするというところで、非常にこちらとしても勇気の要ることなんですけれども、いわゆる環境問題が公害問題と言われておりました時代から、人にいろいろ、もっとほかのこともやったほうがいいのか言われながらも、環境についての研究を続けてまいりました私の今までの考え方のようなものを少しお示しして、幾らかでも皆さんのお考えのヒントになればいいかと、そういう気持ちできょうはお話しさせていただきますかと思っております。

きょうの大テーマが、「環境と対話する都市」ということで、都市環境問題の新しい視点ということになっておりますけれども、これはどちらかといいますと大テーマでございまして、きょう私の後お二方の先生がお話しなさいますけれども、そのお二方が私と、例えば同じようなお考えの持ち主ということでは全くありませんで、ほかのお2人も含めて3人がそれぞれいろいろ違った考えを話すことになるかと思っております。環境問題につきましては、これが唯一の答えだというようなことがないというのが、また環境問題の難しいところでもありますし、また環境についていろいろ考え方が違うということが、また解決を難しくしていることでもあります。ですから、きょうはいろいろな

考え方があるんだなというようなことで、またそれに加えて皆様方自身の考えをつくらせていただければと、そういう気持ちでおります。

今日の環境問題

都市化と人口集中 ところで、都市ということなんですけれども、現代の社会というのは都市化の時代であるというふうに言われています。これは数字で申し上げますと、世界の人口比率が、都市における比率が20世紀半ばでは約30%ぐらいだったわけなんですけれども、国連の推計によりますと、この比率が1985年には41%ぐらい、2000年にはほぼ半数近くが都市に住むと予想されております。日本においても、戦後一貫して国土計画において人口分散を掲げてきたわけなんですけれども、人口の大都市への集中が続いてまいりました。現在、およそ半分近く、45%に相当する5,500万人ほどが大都市圏に居住していますし、また都市部人口の割合は60%強にもなっているという、そういう状況でございます。特に、この10年くらいは、東京圏への一極集中が激しくなっておりますし、また地方圏でも地方の中核都市、例えば九州での福岡とか北海道の札幌とかいうようなところへの集中が著しいものとなっています。このような人口の集積、経済活動が集中化していること、過密などが、環境に過大な負担を強いており、交通渋滞や、交通渋滞がもたらす窒素酸化物による大気汚染の問題とか、事業系のごみの増加や産業廃棄物の処分問題、これはつい最近もいろいろ新聞とかテレビなどをにぎわせておりますけれども、そういう産業廃棄物の処分問題など、大都市への集中、集積による環境問題は非常に深刻なものとなっているわけです。

現在の都市活動といいますのは、資源エネルギーの大量消費を前提としているということで、ここに至って、自然の自浄能力をはるかに超える廃棄物、排熱、排水を放出してきたわけなんです。また今日では、地球環境問題が緊急の課題となっております、その持続可能な開発、これは将来見込まれる経済的、社会的便益の可能性を損なうこ

となく、現在享受できる経済的、社会的便益を最適化するような経済発展の形態を維持するという、そういうことですけれども、こういう持続可能な開発を進めるためにも、経済と環境との調和を図り、環境資源の適正な利用を図る必要があるというように言われています。

南北問題 これほどまでの事態に追い込まれたのは、限りない欲望を満たすためにあらゆる資源、例えば土地とか水とか森林、鉱物資源、さらには人間までもを含む、そういう資源を効率よく利用しようとしてきた結果と言えるのではないのでしょうか。この過程で、世界の中では非常に数少ない豊かな国と、それから非常に多くの貧しい国が生じてまいりました。豊かな国のここに至っての反省は、貧しい国にとっては非常に身勝手なものであり、今日の地球環境問題は南北問題であり、極めて政治的な問題ではないかと私は考えております。

例えばネパールでは、観光産業というのは国民経済に大きく貢献しておりますけれども、環境問題や社会・文化的問題を引き起こしております。エベレストでは、一遠征隊の置いていく廃棄物は500キロにも及ぶと言われております。登山者やトレッカーのためのロッジや暖をとるために、森林が破壊されております。アンナプルナのトレッキングのコースでは、毎年1ヘクタールのシャクナゲの仲間の森が破壊されております。なおかつ、ネパールでは人口爆発と貧困に苦しんでおります。人口増加率は2.6%で、これは30年で倍になるという計算です。毎年7万ヘクタールの森林が失われ、植林はたったの5,000ヘクタールにしかすぎません。過剰な農業やまきのために、毎年1.7ミリの土壌浸食があります。ネパールの川は、世界の2.27%にもなる発電ポテンシャルを持っていますが、そのうちの0.1%も使われていなく、人口の5%しか電気の恩恵を受けておりません。水は豊富にあるけれども、ほとんど利用されていないという状況ですし、30%の人が水道を使っていますが、飲める水ではありません。死亡のおよそ32%が、水によるものと言われていたわけです。ここで、いわゆる先進国の人たちが手つかずの自

然を愛でる、そのために山に行くという、そういうことが環境破壊となり、ネパールの人々の貧困からの脱却を遅らせているとうことになっているわけです。

西洋型発想から東洋型発想へ この話に類したことが世界中、そしてもちろん日本においても生じているということは、忘れてはならないと思います。我々先進国の人間、また都市の住民は、これまでの効率追求型の生活を見直す必要があるのではないかと、そんなふうに考えます。そのためには、これまでの西洋型の発想から東洋型の発想へというパラダイム・シフトが必要なのではないでしょうか。環境を人間に対するものとして見るという立場から、人間もたかだか環境の一部にしかすぎないんだという、そういう立場から物事を考えてみるということが今必要なのではないかと考えております。

国土計画と環境問題の変遷

まず、簡単にですけれども、戦後の都市形成にかかわってまいりました国土計画と環境問題の変遷を次に見ていくことにします。お手元のプリントの右側のほうに簡単な表がございまして、これは今さら説明するまでのこともないと思いますけれども、ざっと国土計画と環境問題の変遷をまず見てまいります。

第1期 戦後に限りますけれども、戦後の国土計画は、まず1950年に国土総合開発計画法に基づく特定地域総合開発計画によって戦後復興を目指しました。その後、経済白書などで、もはや戦後ではないというふうに言われた時代を経まして、1960年には国民所得倍増計画としての太平洋ベルト地帯構想が生まれました。この前後から、大量の人口移動が生じ、都市における過密が問題となり、また地域間での地域格差が問題となってまいりました。そのために、全国総合開発計画——全総とも言われますけれども、全国総合開発計画が1962年に策定されました。一全総は、都市の過大化と地域格差は正のために拠点開発方式を取りました。工業の分散を図るために、新産業都市や

工業整備特別地域を指定したわけです。しかし、産業や人口の大都市圏への集中は続き、都市では過密が問題となり、農山村では過疎が大きな問題となりました。この間、GNPは世界第2位となり、経済大国への道を歩み始めましたが、一全総の掲げた目標とは逆の方向へ進むことになりました。

表 環境問題・環境政策・国土政策の変遷

環境問題と環境政策の変遷	国土計画の変遷
第Ⅰ期 1950～1960年代	特定地域総合開発計画 電源開発
いわゆる公害問題 公害防止計画	1960 太平洋ベルト地帯構想 (国民所得倍増計画)
環境基準	
地域住民の健康と財産を保障	1962 全国総合開発計画 拠点開発方式
第Ⅱ期 1970年代	1969 新全総 巨大開発方式 高速交通通信ネットワーク
生活環境の整備 住みやすい環境の確保	1977 三全総
環境管理計画	定住構想
生活環境の質の指標	
第Ⅲ期 1980年代	素材型重化学工業→ サービス・高度組立産業
住民の快適さ(アメニティ)	
地域環境管理計画 広域環境管理計画	1987 四全総 多極分散型国土の形成 交流ネットワーク構想
第Ⅳ期 1990年代以降	
地球環境問題	
自然観の問い直し 新たな環境倫理	

この間に、環境問題がまた大きな関心となりました。この時期に、急速な経済成長がもたらした、いわゆる公害問題が頻発したからです。いまだにその解決を見ていないような、裁判ざたにもなったような公害問題が生じたわけです。これは、主

として産業活動に伴って排出される重金属や化学物質などが、大気や水質、土壌など、人々の生活基盤を汚染したということによるものです。その汚染の健康に及ぼす影響の評価が重ねられ、大気や水質、土壌などの対象別に汚染度の限界を定めるといったような環境基準がつけられました。その目的は、地域住民の健康と財産を保障するという、そういうものであったわけです。

第Ⅱ期 続きまして、1969年には、新全国総合開発計画——新全総とも二全総とも言われておりますけれども、それが策定されて、これは一全総での反省を二全総では盛り込んだはずなんですけれども、相変わらず巨大開発方式と高速交通通信ネットワークによって国土の効率的な地域間分業を行おうとしたものです。しかし、70年代に入りまして、ご存じのように石油ショックにも見舞われまして、さらに公害問題とか地域問題に対する住民の意識も高まってまいりまして、巨大開発の見直しなどが検討されるようになりました。いわゆる公害対策としては、曲がりなりにも軌道に乗って、産業界や企業も公害の自主規制なしには活動しづらくなり、世間の監視の目も厳しくなっております。このようにして、公害への取り組みという形でのコンセンサスは形成されたと思えます。

その上で登場したのが、生活環境の整備と住みやすい環境の確保という課題です。ある程度の物質的な充足も達成され、いわゆる豊かさ志向が生まれてきたのもこの時期です。各自治体においては、行政面で生活環境の質の指標や、それを決めて施策を講じようとする動きが活発になり、また例えば緑被率とか道路率とか住居率という、そういう言葉もつくって都市づくりなどに反映させようという努力もされております。その努力により、かなり改善されてはきたわけですが、まだ十分なレベルに達しているわけではなく、現在なおさまざまな改善努力が続けられているというのが現状だろうと思えます。

この間に、産業構造の面では、素材型の重化学工業中心から、サービス・高度組立型産業へと変化してまいりました。この変化に伴い、地方に立

地する工場などもあり、いわゆるUターンとかJターン現象が進み、戦後長らく続きました人口の大都市圏集中も、1961年をピークに徐々に緩和され、1970年代の後半には、3大都市圏への人口流入が純減を記録するまでにもなりました。1980年の国勢調査において、東京都のみ人口の減少を見たということがございまして、このときに地方の時代と言われて、非常にもてはやされたことがございました。しかし、一方で地域間の所得格差は1978年から79年ごろを境に、再び拡大化の兆しが見られるようになりまして、大都市圏への人口流入も1981年には増加に転じた、ということになっております。

第Ⅲ期 一方、1980年代には、さきの生活環境の整備という、その流れをくみつつ、さらに豊かで潤いのあるまちづくりをしようという動きが出てまいりました。その際に配慮されたことの1つは、住民の快適さ、これはアメニティという言葉で言われておりますけれども、このアメニティに対する主観的な評価を重視しようという、そういう方向性でした。1985年には、公害の少なさ、自然とのふれあい、都市美とゆとりというような観点から、身近な環境の数値化を目指す環境評価指標が北九州市や東京都など多くの自治体でつくられ、これを目標に地域環境管理計画などが策定されております。また、森林や水辺の価値を景観保全、自然と親しむ場の提供、地域の歴史や文化の保全、生活環境の安定など、非常に幅広い視点でとらえ、その価値を見直すことで保全への方向づけをしようという努力もされてまいりました。これは、人間にとっては自然環境が持つ価値とは何かを見直す、ある意味では我が国における重要な第一歩とみなすこともできるでしょう。

1982年には、三全総の見直し作業が始まり、現在、四全総ですけれども、これは多極分散型国土の形成を目標に、交流ネットワーク構想を開発方式とした四全総が1987年に策定され、今日に至っているという、そういう状況です。

第Ⅳ期 次いで、1990年代は地球環境問題の時代に入っております、それとともに人間にとっての環境を考え、人間にとって直接間接の利害の

みを考慮に入れるという考え方から環境そのものを幅広く評価するべきであるという、そういう方向へ変わりつつあるのではないかと感じております。環境問題の目標やその背景をなす価値評価の基準が拡大することにより、今改めて我々の持つ自然観の問い直し、さらには新たな環境倫理を議論する必要性が出てきたのではないかと、そのように考えております。

わが国の都市環境政策

次に、今までの国土計画、環境問題の流れに対しまして、じゃ都市環境政策はどのようなものであったかということ、また少し簡単に見てまいりたいと思います。これも同じく、先ほどの表にキーワード的に入れてございまして、それを見ながら聞いていただければと思います。

公害防止計画 まず、60年代の公害時代には、企業を対象に公害発生源を防除し規制するということを主たるねらいとした公害防止計画が策定されました。しかし、これは殊さら都市や地域といった広がりを対象として、その環境を改善しようとする視点はなかったものです。しかし、やがて都市内に存在する公害発生源を住居地域から離す政策がとられるようになりました。大規模コンビナートが各地につくられ、そこに大工場が集約されて、都市住民への直接的な公害被害もかなり防ぐことはできました。しかし、このことが逆に幾つかの禍根を残すことになったとも言えるでしょう。コンビナートの多くは臨界部の埋立地に造成されましたが、都市周辺の海岸線の大半は人工の海浜になってしまい、今になって自然豊かなウォーターフロントを求めようとしても、もう貴重な海辺の環境は皆無に近くなっているという、そういう状況です。

環境管理計画 また、工場が集中したり大規模化することによって、生産効率は高まりましたけれども、つまり経済のスケールメリットは達成されたわけですけれども、そのことがまさに今日の環境問題の1つの要因にもなっているわけです。特に先ほど、アメニティーという言葉が出てきた

ということを述べましたけれども、これはいわゆる1977年にOECDのレポートにおいて、日本の環境政策は汚染を減少させるには大いに成功したが、環境に対する不満を除去することには成功しなかったと、これもやはりある意味での外圧的なことで、そこからアメニティーも考えなきゃいけないという、そういう関心が喚起されてきたわけです。従来の公害防止という環境行政から、都市のアメニティー追求型の、いわば環境を管理創造するというような発想へと転換してまいりました。そして、豊かで潤いのあるまちづくりが主要な課題となり、各自治体でも環境管理計画がつくられました。ただ、その中身は町並みの美観の向上を求めるなどが中心であり、しかも当時まだ経済と利便の追求が重視され、開発計画の部分的な手直しとして環境配慮を取り込んでいこうというのが基本的な姿勢だったと言えるかと思います。そういう中での環境管理計画は、せいぜい都市の環境像はいかにあるべきかという、そういう問題提起以上のものではなかったのではないのでしょうか。

広域環境管理計画 1970年代の後半から80年代にかけて、都市圏の拡大に伴い広域にわたっての大気や水域の汚染、自然環境の喪失、廃棄物の増大、ヒートアイランド現象など、多種多様な都市環境問題が深刻なものとなってまいりました。こうした問題は、都道府県の枠を超えて広がるということで、今度は国のほうが中心となり、特に環境庁などが中心となって広域環境管理計画というものが作成されたりしております。その理念としては、潤いと持続性のある人間環境系の形成がうたわれ、それに向けての基本方針として、都市生態系に配慮した都市システム、それから環境に配慮した社会システムの形成、それから環境資源の持続的利用、地球並びに地球環境への配慮の徹底などが挙げられております。この広域環境管理では、資源エネルギーのあり方や開発速度の管理までが対象と考えられ、これは従来の環境行政からは一步踏み出したもの、つまり経済の前提に環境があるという点で画期的なものであったと言えるかと思います。ただ、これを実行する具体的な施策というものをまだ伴っていないというのが現

状だと思います。

望ましい都市環境政策 では、その都市環境政策はどのようなものが望ましいのだろうかということになりますけれども、今日での地球規模の環境問題というものは、人類社会の共通の課題であり、環境との調和を保ちつつ長期的発展を実現するという、先ほど述べました持続可能な開発が求められています。そのためには資源エネルギーの大量消費を前提とした今日の都市構造とか、交通体系、市民生活に変革が求められているのではないのでしょうか。社会や経済の仕組みにいかに関環境を取り入れるかが課題であり、環境のために社会・経済システムをどのような手段で、どのように変革していくのが検討されなければならない、そういう時代に入っているわけです。

例えば、都市整備にも環境保全の視点が必要であり、今後の都市環境政策としては資源エネルギーの循環的再利用のメカニズムを都市構造の中に組み込むことが望まれています。このような背景から、政府、これは国による政策としまして、例えば環境庁が提唱するエコポリスというようなものとか、あるいは建設省が提唱するエコシティ、これは環境共生都市と——共に生きる、環境共生都市というふうにも言われておりますけれども、そのキーワードが地球に優しい、それからアメニティー豊かなまちという、そういうようなことでまちづくりをしていこうという、取り組みが今されているところです。

経過的経済手段 そうような計画によって都市がつくられていくまでの間、環境をそのままほうっておくわけにはまいりませんので、いわゆる変革までの過渡的な手段としましては、どうしても何らかの手を打っておかなければならないということで、例えば経済的手段としまして、1つは、考え方としましてグリーンGNPというようなものが提唱されたり、これはいわゆるGNPから環境保護目的の最終需要と、それから自然環境の悪化分を引いて考えるというようなものですけれども、そういうようなものが提唱されていたり、もう少し具体的なものとしましては、法律、あるいは経済制度による方法で、例えばオランダなど数

カ国で既に実施されておりますCO₂の排出量に応じた課税というようなものを考えております。こういう課徴金とか補助金制度ではありませんけれども、いわゆる法律などによる方法というものは、かつて環境容量の枠内でのいろいろさまざまな活動を制限したりというようなことで、有効に働いたことは事実だと思えます。

それからあと、補助という形では、最近エコマークというようなものがいろいろな商品につけられておりますけれども、そういう商品とか、あるいは技術に対する補助もされております。

それからまた、これもなかなか実際に運用するのは大変なことなんですけれども、市場メカニズムによる方法というもので、排出権の市場。つまり、大気汚染物質の許容排出量をあらかじめ工場、事業所単位ごとに割り当てておきまして、その割当量を超える工場は、余裕のある他の工場からその排出権を譲ってもらって、それで操業するという、その排出権を売買するというような、そういうようなことも考えられております。これは、あくまでも市場が成立すればというような前提によるものでありますし、例えば環境保全につきましても、なかなか反発が多いというようなことで、実際にいつになったら日本でも実施されるのかというのは、非常に困難なところではないかというふうに考えております。

ロゴスの論理からレンマの論理へ

現在、できるようなことについては、今、若干述べたわけですが、今後地球環境問題ということで、もっと先のことで、先と申しましても私たちが生きている間なのか、死んだあとのことまでも面倒見るかということは、それぞれ皆さんのお考えもあるでしょうけれども、少なくとももう少し、21世紀の初めぐらいまでというようなことで環境問題を考えるときには、やはりもう少し意識変革が必要なのではないかと。これは先ほど所長も、今まで効率よくいろいろなものを、電気とか車とか利用してきたようなことについての若干見直しも必要なのではないかというようなこ

とを、所長からも申しておりましたけれども、例えばそういうような考え方をちょっと導いていくという、そういうことが必要なのではないかと。ここで、ここにいわゆる題名でありますところのパラダイム・シフトというものが必要なのではないかと。ここに結びついてくるわけです。つまり、これまでの地域、あるいは都市計画においては、常に環境というものは地域や都市の下位、つまり下ですね、下に位置づけられていて、環境からみた地域、都市計画というものはほとんどなかったということが言えるのではないのでしょうか。例えば、水利用についても、まず先に経済を中心とした計画があり、その中で水需要がこれだけあるから、水供給はこれだけ必要、したがって、もっと水資源を開発しなければならないと、そういう話になってくるわけです。そのために、例えば新しくダムをつくるというようなことで、先ほど過密過疎の問題が出てくるというお話をしましたけれども、東京都などのために、ある意味では東京都のために群馬県とかというようなところでダムをつくるというようなことで、それまでの地域社会が壊されるというような、そういうところも現に生まれてきているわけです。

また、これは今、水資源の話でしたけれども、例えば環境の場合でも同じようなことで、いろいろ人間活動を行うことによって、さまざまな環境影響が生じてまいります。その影響を小さくするために、活動の水準は変えずに、つまり、今享受している便利さから効率というものはそのままにしておいて、例えば自動車の排出ガスを減らす技術を開発するという、そういうような対策で賄ってきたのです。社会経済活動において、いかにそのような活動を効率よく行うかというようなことが、最大の目標というふうになっていたわけです。ですから、特に都市においては環境、例えば水とか緑とか土などは、人との距離をできるだけ遠くするように計画されました。それが快適な生活であるというふうにみなされていたわけです。例えば、小さな川や用水は危ない、汚いということでふたをされ、その上が道路になったりもしました。それから、海岸線では堤防によって新たな土地をつ

くり、また雨でも不便を感じないように道路は舗装されてしまったわけです。それからまた、わずかな土地も有効に使うということで木々は倒されてしまったわけです。しかし、物質的に満たされてまいりますと、人々が今まで忘れていた感覚、水や緑や土から得ていた感覚が呼び戻されてきたというのが現在ではないでしょうか。そして、川や用水のふたが取り除かれ、水や緑や土と接触するまちづくりが要請されるようになってきているわけです。

ジオ・エコ・ソシオシステムとしての環境のなかの人間 例えば、環境、これもきょうのプリントの右下のほうに何か簡単な絵をかいておりますけれども、べつにこの絵がびったりあらわしているというよりも、概念的なもので、環境を3階層システムとしてあらわしているわけですが、ジオシステム、エコシステム、ソシオシステムというふうに読んでいただきたいんですけども、ジオというのは、いわゆる地球レベル、地学的、あるいは気象とかいう、そういうレベルです。それから、エコシステムは、いわゆる生態学とかあるいは動植物とかという、そういうところとっていただきたいと思っております。それから、ソシオは、いわゆる社会・経済環境というふうなもの。その中に黒く塗りつぶしてございますが、そこに人がいるという。つまり、環境をジオ・エコ・ソシオの、3階層のシステムというふうな形で認識すれば、人間はソシオ環境の一部であります。ソシオ環境はエコ環境の一部であり、またエコ環境はジオ環境の一部であるという、そういうことになれば、現在の社会がジオシステム、あるいはエコシステムを常に認識することによって、人間がたかだかそういう環境の中の一部にしかすぎないんだという、そういう感覚を持つとうというものが、今ここで述べようとしているパラダイム・シフトの基本にあるわけです。ジオとソシオ環境、及びエコとソシオ環境との接点を意識できるように、水の再利用や水辺空間の創造などが行われるようになってきているわけです。しかしまだ環境から都市計画へという流れにはなっていないように私には思われます。人間とそれ以外を対立させるような発想とい

うのは、どちらかというところヨーロッパからの発想ではないかというふうに考えます。これからの考え方としては、人間も環境の単なる構成要素にしすぎないという、これはどちらかといえばアジアの伝統的な発想ではないかと思うわけですが、そのアジアの伝統的な発想をもとにしたエコとジオを内部化した都市づくりが必要になってきているのではないかと考えております。

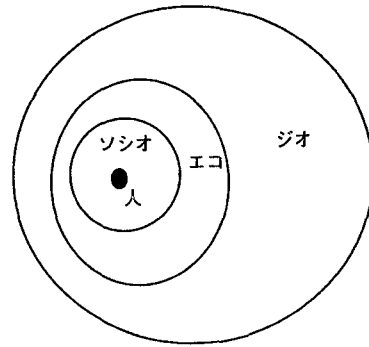


図 ソシオ・エコ・ソシオの3階層システムとしての環境

ロゴスの論理とレンマの論理 今ここで述べた発想の転換は、そのレジュメに、4番目のところに書いてございますが、ロゴスの論理からレンマの論理へと、何か片仮名で書いてございますけれども、ロゴスの論理というのは、これは古代ペルシャのゾロアスター教の二元論を基礎としてユダヤ教、キリスト教、そしてイスラム教と、主として乾燥地帯及び砂漠で受け継がれてきたものです。これは、その文章にも書いてございますけれども、Aかnot Aかというふうに、非常に認識において差別化を前提とする論理でして、単純明快な二者択一の論理です。それに対してレンマの論理は、その下に書いてございますが、Aがあるのはnot Aがあるからという認識を前提としております。これは、仏教の中での空があるというような、そういうところに結びつくかと思っておりますけれども、これはバラモン教に対する宗教改革として起こった仏教とかジャイナ教という、主として森林を中心とした地域で受け継がれてきた、そういう考え方です。ですから、その結果としまして、つ

まり乾燥地帯、砂漠地帯で受け継がれてきた考え方と、それから森で受け継がれてきた考え方とでは、当然自然に対する認識は異なっていると言えるわけです。

かつて、我が国においては環境というのは、私たちが包み込む無尽蔵で不死身の世界というふうにかえられていました。私たちはその一部であり、その内部に混然一体として存在していた。その中では、私たち人間は吹き飛ばされるほどにか弱いものであり、頼りない。だけれども、その懐に飛び込めば、限りない大地の恵みを与えてくれるというような、そういうふう環境を考えていたと思うんです。ところが、近代化の過程で、特にヨーロッパの近代的認識観の影響を受けて、環境は私たちから切り離されて外部化され、対象化されてしまったのではないかと、そのように考えます。このとき、環境は私たちの周りに広がる無尽蔵で不死身の存在ではあるんですけども、外部世界となってしまったわけです。私たちにとっては、環境はよそのものとなってしまった。開発というものは、そのようなよそのものを対象とし、それを変えて、得手勝手に都合よく利用する、そういう営みであったと言えるのではないのでしょうか。それは、かつては無尽蔵で不死身のはずであったわけですので、開発というものが環境にとって敵ではあり得なかったわけです。

ジオ・エコ・シオシステムとの対話 つまり、今後の考え方としましては、開発と環境を完全な対立項としてとらえるのではなくて、短期的には対立しても、長期的には何らかの形で協調し合うような、そういうことを模索すべきではないかと。つまり、ジオシステム、あるいはエコシステムを克服の対象として内部化したり——これはかつての考え方です——無尽蔵で無限な外部の世界であるというふうにみなすというようなことではなくて、先ほどの図にありますように、ジオ、エコ、ソシオのシステムの内部の一員としての視点、それに包まれていることの意味を認識できるという、そういう謙虚さが必要なのではないかというふうにかえます。そのためには、ジオ、エコ、ソシオシステムとのコミュニケーションを怠らないこと

が必要なのではないかと。そこに、今回の講演会のテーマであります「対話」という言葉が出てきているわけでもありますけれども、そういうコミュニケーションを怠らないということが、持続可能な開発の必要条件でもあり、そのときには人から眺めるという意味で、特に生活者の視点が優先すべきではないかと考えます。

さらに、今までいろいろな計画がされてまいりましたけれども、ここでこれまでの計画の目標自体が変化しているのではないかということ。その目標が、ほんとうにこれでいいのかということも、自分自身で問うてみるという姿勢も必要なのではないかというふうにかえます。つまり、これまでのようなログスの論理による効率の追求に限界があるのであれば、これからは、レンマの論理で考えていかざるを得ないのではないかと。そこに、パラダイム・シフトの必要性があるというふうにかえるわけです。

日本型モデル 例えば、これは一番最初に申しました西洋型の発想から東洋型発想へということなんですが、これは私自身も含めまして、多くの日本人が反省しなければいけないのかもしれませんが、例えば経済学の中、特に私が専門としております都市経済学などにおいて、都市経済のモデルというのが、全くアメリカのモデルなんですね。私自身は、アメリカ本土には行ったことはありませんけれども、アメリカでかなり暮らした人の話によりますと、あの都市経済のモデルが、アメリカに行くともすごくよくわかって、まさにあのとおり、モデルどおりに成立するんだという話を聞きます。それが、今現在のはやはり日本の中で、そのままモデルがそっくり持ち込まれているというのが多くの、私たちも含めて経済学者がやっぱり反省しなきゃならないところでもあります。

それから、ほかの人たちをちょっと批判するのも何なんですけれども、例えば建物のデザインにしましても、例えば都立大学の近くは多摩ニュータウンということで、いろいろな団地がつくられておりますけれども、ある場所はフランス風であり、ある場所はスペイン風であり、都立大学自体はどうもドイツ風らしいんですけども、どうし

て多摩ニュータウンがフランスだったり、スペインだったり、ドイツでなきゃいけないのかという、非常に疑問に感じます。そのフランス風も、最近トルコに行ってまいりましたけれども、何のことはないトルコ風なんですよね。トルコの人に聞きましたら、いや、これはエーゲ海のこの辺では、要するに、そこの土地の風土に合った素材を使ってやれば、こういう家ができるんだと。つまり、そこの風土に非常に合った建物になっているわけですね。それが、何かどういうわけかトルコ風と言うと、どうも日本人は嫌な思いをすするでしょうから、南フランス風というようなことで持ってきて、何のことはない地中海あたり、フランスもそうですけれども、あたりに行くと、もうそこいらにあるような家が多摩ニュータウンに並んでいるというような、そういう状況になっています。

一事が万事で、どうも日本の風土に合ったというものを取り入れてこなかったというのが、どうも今までの、例えばまちづくりではないだろうか。ここいらで、明治維新以来、いろいろ近代化の過程で外国から学ぼうという、その姿勢は非常によかったし、それで非常に世界の先進国入りもして発展してきたわけですけれども、ここいらで少し発想を変えまして日本的、これは先ほどのジオ、エコ、ソシオというそのすべて、それにいわゆる文化というものももちろん入っていますけれども、そういうものを含めたさまざまなところでのモデルづくりというものが必要なのではないか、それが環境を考える上でも大いにプラスになるのではないかと、そういうふうに考えております。

今述べましたような、例えば日本型というようなことでやりますと、何となく昔返りというような、昔に戻るとというような、何かマイナスのイメージを与えるような気がするかもしれません。けれども、これは例えば現に今水辺空間の創造というような名前のもとで行われているということは、これは30年前、皆様方の30年前ごろを思い出してもらえれば、水辺と親しむというか、水辺で遊ぶとかというのはごく普通であったと。それを今一生懸命、創造という名前のもとでつくっているという。戻るという言葉が非常に、あまりマイナ

スのイメージを与えてよくないので、創造というような言葉が使われているのではないかなと、私はそのように思っております。

生活者の視点 ただ、ここでやはりなくなったものをつくるわけですから創造でも構わないわけですけれども、今と昔ではさまざまな前提条件が大きく変わっております。ですから、例えば都市での核家族とか、あるいは高齢者が増加していることとか、それから女性が社会進出しているというようなことで、大きく社会条件が変わっております。ですから、例えばごみの問題などでも、消費者に過度の負担を強くないというような、そういう配慮が必要だと考えます。

つまり、これは無理のないシステムが長続きをし、それからまたそれが効果があるということにもなるからです。このようなシステムづくりのためには、地域社会の構成員の意見をうまく取り入れていくということも考える必要があるかと思えます。その例としまして、例えば市民参加の例として、大阪の吹田市の例ですけれども、リサイクル研究所というものがありますが、そこで市民研究員というものを1年間という期限つきで囑託のような形で採用しまして、1年間、専属の研究員と共同で研究を行って、いろいろアンケート調査もしたり、いろいろな提言をしたりというようなことをやっております。これは、1つには生活者の考えを取り入れるということにもなりますし、それが1年間というサイクルで回転することで、市民への環境教育にもつながっていくわけですね。この環境教育とか、あるいはこれはまた環境情報の公開ということにもつながるわけですけれども、環境情報ということに関して、私自身の経験をお話しさせていただきますと、かつて霞ヶ浦と琵琶湖の住民を対象としまして、水道水に対する水質のアンケート調査を行ったことがございます。そのときに、明らかに霞ヶ浦のほうが汚い水、指標で言いますと4倍ぐらい汚かったはずなんですけれども、はるかに琵琶湖の周辺の住民のほうがクレームをつける人が多かったわけですね。つまり、汚いとか臭いとか。つまり、それがどうしてそうだったかということをいろいろ考えますと、その

ときには既に滋賀県では洗剤運動などがございまして、琵琶湖の水は汚いから何とかしなきゃいけないというような、非常に住民運動とか市民運動が盛んになっていたわけです。ですから、おのずと水に対する関心も高まっていて、そういう反応が出てきたのではないかというふうに思います。行政側からすると、汚いものにふたをしておいて、霞ヶ浦の周辺の住民のように、何も文句を言わないほうが都合がいいのかもしれないけれども、これからの環境ということを考えるときには、どちらかといえば琵琶湖周辺の住民のように、少々口うるさいけれども、環境を少しは考えようという、そういう住民をつくっていくというような、そういう姿勢も必要なのではないかというふうに考えております。

それからまた、環境教育ということでは、これもまたアンケート調査で、これは学生を対象に行ったものですが、将来の環境に対して、あなたはどのくらいの負担をする意思があるかという、これは専門的な言葉ではオプション価値というふうに言われていますけれども、それをちょっと計算するために学生にアンケート調査したことがございます。最初に、いろいろ「水辺環境に行って、どういうことを意識しますか」という、項目を10項目ぐらい並べて聞いたんですが、そのときには非常に低いパーセンテージしか出ていないんです。アンケートとしては非常に失敗したわけですが、後のほうでもう一度同じ質問をしたわけですね。「ところで、あなたは今後水辺に行ったときに、どういうことに注目しますか」としましたら、全く同じ10項目につきまして、数字が上がっているわけですね。これは、1つにはアンケートをとるということが環境教育にもつながるということです。今のこのアンケートは1回限りですので、それで終わってしまえば、またもくあみで忘れてしまうんですけれども、例えばこういうことを繰り返していくというふうなことが、広く情報を公開することにもなるし、環境教育にもつながるんだなという、そういうふうにも考えております。

いろいろ、あまりほんとうにお役に立つようなことを述べたかどうかわかりませんが、何

らかの皆様方のお考えのヒントの1つにでもなればということで、きょうはパラダイム・シフトの必要性ということを述べさせていただきました。つまり、我々はただか環境の一部にしかすぎないんだという、そういう謙虚な姿勢で、環境の反応を見ながら、環境と対話しながら暮らしていくという、そういう姿勢が必要なのではないかと、そういうことで私の話を締めくくらせていただきたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。(拍手)

3. 都市に生きる

【司会】 どうもありがとうございました。

申しおくれましたが、私、きょう司会をさせていただいておりますけれども、都市研究センターの中林と申します。

それでは、続きまして東京都立大学工学部教授、また私どもの都市研究センターの兼任研究員もやっております川口士郎先生に、「都市に生きる」というテーマでお話をいただきたいと思っております。川口先生は衛生工学、特に上水道、下水道、ごみ処理ということで研究を重ねておられます。よろしく願いいたします。

【川口】 ただいまご紹介にあずかりました川口でございます。どうぞ、よろしく願いいたします。こういういい会場で、皆さん熱心そうに聞いてくださいますし、私がこういうところで勝手なことをしゃべるといことは、私の精神衛生上大変よろしいというふうに考えております。多分、1時間ぐらいしゃべれということになっておりますから、1時間ぐらい、今申しましたように勝手なことをしゃべらせていただきたいと思っております。

都市と環境

最初に言いわけをさんざん申しますけれども、私は都市とか環境とか、そういうふうなことはあまりよく、ほんとうはよくわからないんです。いろいろ考えまして、後でよくわかんないという理由を、またご説明申し上げますけれども、要する

に私のようなばかな頭ですとよくわからないんですね。私は、今ご紹介にあずかりましたように土木屋でございまして、物をつくる、土木工学ですからね、上水道とか下水道とか、そういうものをつくって、今有名なゼネコンに発注する側をやってきました、現在まで生きているということでございます。ですから、私のような雑駁な土木屋の話すことというのは、あまりそう難しいことは申しません。

今、萩原先生のお話もございましたように、要するに今は物をつくればいいという時代ではないと、物をつくったらどうなるかということを考える時代だというふうなことを申されまして、私も土木屋として非常に反省しております。反省してどうということはないんですけどね。いい知恵が浮かぶか、まあ、多分浮かばないと思います。

この間、学生を連れまして、私のところの3年生の学生を連れて、年に一遍見学旅行というのをやるんですけども、学外の見学に行くんです。それで、先生が何人かくっついて、3年生が何人か来まして、宮ヶ瀬ダムの工事現場を見に参りました。皆さんの中で、宮ヶ瀬ダムというのは行かれた方おられるかもしれませんが、あそこに行くときに、きれいな虹の大橋というのがかかっていますね。それを越えてダムの現場を見に行くわけですね。それで、それを見てから、うちは土木工学科ですから、今度は湘南のほうの湘南バイパスというのを見に行きました。今工事やっていますけどね。土木屋、私も何遍も言いますように土木屋、単純明快な土木屋でして、うちの学科の学生も単純明快な土木屋にならんとしておりますから、ああいふダムを見たり、バイパス工事なんか見ると、なるほどなるほどと、こういうわけですね。環境なんていうことは、あんまり考えないわけですね。つくっちゃえばいいわけです。宮ヶ瀬ダムに行きますと、やっぱり、このごろは環境ということは大事になりまして、コンクリートのダムをつくるとき、セメントに砂利をまぜるわけですね。砂利はどこからとるかということ、横っちょの山を削って、それを碎石にして砂やら砂利やらをつくって、それをセメントにまぜて打ち込むわけですね。その山

を削っちゃいますからね、そのダムのちょっと上流側の、要するに右岸側の山を削ったわけですね。ぱっくり削ったわけです。そこのところ、やっぱり跡そのままじゃまずい。昔はそのままにしていたんですね、今、そこにコンクリートの枠をつくりましてね、せいぜい2メートル近くぐらいの枠をべったりつくりまして、そこに土木用語で植栽ということをするんですね。木を植えるわけです。いいかげんな木を植えたんじゃないんですね。杉とかヒノキとか、ああいうのはだめなんですね。やっぱり落ちないように、よく根を張る、常緑の根を張るやつを植えないといけない。どういう木を植えたらいいかって今試験中だと、宮ヶ瀬ダムの人言ってましたけれども。要するに、山を削った後、緑にまた戻そうというわけですね。そういうことで、土木工事の環境整備なんて、そんなことをやるわけですね。

そもそも宮ヶ瀬ダム、何でああいうものをつくるかと申しますと、皆さんよくご存じのように、神奈川県内の水需要を、今はちょっと足りていますけれども、将来の水需要を満たそうというわけです。当たり前なことですね。都市で水が要るからダムをつくる、当たり前。

ちょっと話は違って——話が違うというか、場所を変えて、例えば今、環境保護の方々がいるいろいろな問題にしています長良川の河口堰というのも、要するにあの近辺の水需要を満たすために川に河口堰つくってやるわけですね。要するに、都市で水が要るから何かつくると。これは、水道に限らずガスでも、電力でも、道路でも、港でも、下水でも、ごみ処理でも、一般の企業の工場でも同じことですね。一口に言えば、ある目的を持った物、土木屋さんは構造物と言っていますが、構造物を、古い日本語で築造するわけですね。ごく当たり前なこと。そういう物をつくりましますときに、例えば、長良川の河口堰はそんなことないでしょうけれども、宮ヶ瀬ダムをつくるかといいますと、その貯水池になるところの住民はどきないということになるわけですね。ごく当たり前なこと。昔はダムつくると言うとき、いや、どきたくない、おれたちが先祖伝来住んでいるところにダムつくっ

て、池にしちゃって、おれたちにどけて、何というけしからんことを言うと、さんざんもめたわけですね。一番有名な例は、筑後川の下釜、松原ダムなんて大変なことになっちゃって、ダムつくるときの住民の移転というのは大変な問題だったんですけれども、最近随分違うみたいですね。要するに、ああいう宮ヶ瀬ダムのところに住んでいた人たちというのは、出たがっていたんですってね。つまり、どういうことかといいますと、あんな山の中で蚕なんか飼って生活できないですよ。ですから、ダムができたのを幸いに、さあ引っ越そうというんで、特に若い人はうれしかったという話ですね。年寄りも、やっぱり先祖伝来住んで、そこにいますから、ちょっとあまり乗り気じゃないよという話なんですけれども、若い人は出たがっているみたいですね。とにかく、電車の走っているところに引っ越せますからね。ですから、昔のダムの補償問題と大分違って来たんです。今、それで、そのダムをつくる人の話ですから、いまい信用できるかどうかわかりませんが、住民を再配置というか、再定住というか、要するに移すと、結構、皆さんハッピーにやっているというふうなことをおっしゃっていました。

でも、こういう、皆さんどきなさいというのも、何か神奈川県とか東京都とか、そういう大都市がバックにいて、お金を出して、ある目的を持って物をつくるときは、まあまあ、お金が出場所がありますからいいですよ、結構うまくいく。ところがですよ、一番いい例は、例の普賢岳の爆発で、あそこで住んでいられないから、皆さんどきなさいって、どきなさいじゃないですね、どかざるを得なくなっちゃったとき、一体その住民にだれが金出すんだというんです、こういうところじゃ。この間、北海道の島で要するに、津波に洗われちゃって、あの人たち引っ越すたって、どこからも金が出ないそうです。ですから、大都市がバックにあって、何か物をつくるときは非常にハッピーなことになるんですけれども、自然災害地というのはほんとうに困っちゃうんですね。それを、じゃ今の法律とか何かで財政措置ができる

かという、どうも新聞なんか読んでいる限りでは、あまりはつきりしませんね。

それが、東京都に直下型の地震でも起きましてね、都庁も含めてみんなひっくり返っちゃったという、多分特別立法で何かするんでしょうね。ですから、災害も、東京都がぶっ倒れるような大災害ですと、案外いいのかもしれない。とにかく、特別立法しますからね。でも、災害救助法ぐらい発動したぐらいじゃ、どうもね。波で洗われちゃった家ももとに戻るかという、そうもいかんでしょう。ですから、この辺はかなり僕問題だと思いますね。

とにかく、何遍もくどいこと言いますが、大都市が負担している、バックにある事業、水をためるダムにしろ、ガスにしろ、電力にしろ、そういう大都市がバックにいるような物をつくるときは意外とうまくいくんだと。ときどき、うちの学校にいろいろな雑誌とか、パンフレットとか、いろいろなものが来るんですよ。例えば、このごろ、例えば何とか県とか、例えば、建設省の何とか地建とか、そういうところがPRばかりでして、要するにわしらのところは一生懸命国土を改造しているんです、いろいろやっていますと。環境にも配慮して、いろいろやっていますと、いっぱいパンフレットがつくんですよ。あの方々のほんとうの腹の中は、うちの大学の卒業生にぜひ来ていただきたいというのが目的なんです。そういうことで、パンフレットがどっさり来まして、たまたまそういうパンフレットを見ていたら、ある県の将来の計画なんていうのがあるんですね。それはきれいな地図がついていて、どこにどういいうものをつくって、どこに博物館をつくって、どこに美術館をつくって、どこに道路を引っ張って、新幹線がこう通ってって、飛行場もできると、すごくきれいな絵なんです。将来、21世紀に目がけた何とか計画っていうんでしょう。そういうのが多いですね。最近。

結局、そういうものをつくって、それが環境に溶け込む施設になるというようなことはうたい文句にしますけど、要するにそういうものというのは、そういうものを利用するお客が銭払って、そ

の施設を維持するわけですよね、しょせん。ですからうまくいく。とにかく、逆に言いますと銭の取れないものはだめなんです。銭の取れるものはどんどんやっていこうという風潮じゃないですかね。あれでしょう、うたい文句は、そういうものをつくったって環境は大丈夫、もちろん環境アセスメントはしております、皆さんに迷惑をかけない、こういうわけですよね。ほんとうかなと思うんですけどね。ほんとうなんでしょうね、きっと。

生活環境と称するもの

先ほど申しましたように、宮ヶ瀬ダムでも山削って、骨材をつくって、削った後の山に木を植えて、つまり自然に戻すということをするんですね。自然に戻るんですかね、私よくわからない。後で自然とか環境とかいうことについて、私の考えを申しますけど、自然に戻るって、とにかくよく言いますよ、最近ね。ちょっと待てよと思えますけれど。

それで2番目は、先ほど申しましたように、引越した人たち。つまり水没——水没というか、ダムになるところに住んでいた人たちが引越して、新しいコミュニティをつくって、それがうまくいってますということですよ。これが、うまくいってますというのはい言いで、つまり僕思うんだけど、ほんとうのダムを建設する主体というのは、あんまりそういうことに正直言って関心ないんじゃないかと思うんですよ。とにかく引越してもらって、うまくやればいいです。文句来ないというふうを考えているんじゃないかって、私はそう思ってますけどね。こういうのはげすの勘ぐりって言うんでしょうけれども、とにかく、宮ヶ瀬ダムにしる、湘南バイパスにしる、何の工事でもそうなんでしょうけれども、何か物をつくります。そこに邪魔になって、そこに住んでいる人間は邪魔ですからね、ちょっとどいてくださいと。その人たちは適当に、事業主体がお金を出して、どこかに再配置する。引越した人たちはハッピーに暮らすというようなパターンのこ

とが、日本全国で今進行しているんじゃないですかね。それで、まあうまくいっていると、よろしい、別に文句ないでしょう、うん、文句ない、こういうことになっているわけですよ。

同じようなことが、都心でもあるわけですね。例えば、この東京都庁をつくる時に、みんなどけと言ったのかどうか、もともとここは淀橋浄水場の跡ですから、どけて言ったって、もともと住んでいる人はいませんけど。ビルができて同じことですね。とにかく、一時よく言われた地上げ屋が来て地上げして、そこにビルが建つ。それで、皆さんよくご存じ、土地を売った人はどこかに出ていくわけですね。その行く先、どこに行っても、例えば多摩ニュータウンにまた住んで、うまくいっているかどうか、知りませんね、そんなこと。そういう追跡調査はだれもしていない。要するに、だれも関心がないわけですね。各自はしようがない、土地を売ったんだから、そのお金を持ってどこか行くわけでしょう。結構ハッピーになっていると、結構ですね。

都心でビルを建てる時は、みんな出ていきなさい、どこか行ってハッピーに住む。郊外のほうはどうなっているかということ、盛んに住宅開発が進むわけですね。どこやらから来た人たちがそこに住むわけです。郊外、うちの都立大学の近所でもやたら、いわゆるマンションというやつがふえまして、そのマンションをつくっているのは大抵業者でしょうけれども、その業者というか建設主体は、だれか引越してきて入居してくれればいいわけでしょう。で、うまくいくわけですね。別に不思議はない。万事めでたく日本は動いていると、こういう仕掛けになっているんですけどね。

そこで、都心のビルの周りでも、それから郊外のマンションの周りでも、要するにうたい文句は緑がある、公園がある、小さいお子さんがいたら、学校もありますよ。私住んでいるのは藤沢なんですけど、藤沢ですと、近くに江ノ島もあります、海があるわけですね。もうちょっと裏のほうに行けば、ちょっとした山もございまして、環境いいと、ぜひいらっしゃいということですね。そういうことを言うわけですよ、どこでもかしこでも。つまり、

きれいなんです。環境がきれいなんです。便利だと。つまり、緑があって便利。もうちょっとかたい言葉で言いますと、インフラストラクチャーというのがございまして、はやってる言葉ですね、インフラストラクチャー。要するに、生活に必要な基本施設はそろっています、おまけに木が生えてて緑ですと言うんです。非常に結構なことですね。

昔から日本人のよく言うことに、そんな緑がなくても、インフラストラクチャーがなくても、金さえあればどこも住みよしと昔から言ってるんですね。お金がなきゃ、どんなきれいなところもだめなんですね。お金があればどこも住みよしと。これは随分古い、僕の記憶だと、これは一休禪師か何かと言ったんじゃないかな。金さえあればどこも住みよしですよ。僕なんか、都立大学を定年で退職したら、インフラストラクチャーの完備した緑のある郊外なんて嫌ですね、年食って歩くのも面倒ですから。一番理想なところというのは、東京の下町の5分歩くとすべてそろうという下町がいいですね。そう思いませんか、皆さん。でも、そういうところはだんだんなくなりつつあるんですよ。今。だって、東京の下町、例えば都営新宿線の先ちょのほう、隅田川の向こう側あたり、昔はいいところだったんでしょう。ああいうところで、お金さえあればいいところですよ、ごみごみして。大体、道路が幅100メートルで、こっちのほうに家、こっちのほうに家、渡るのに命がけなんていうところは、いいところじゃないんですよ。ほんと。例えばね、私オーストラリアのアデレードというところに1年おりましたけれども、昔。アデレードもそうですしね、それからキャンベラあたりでもそうなんですけど、新しい住宅を建てる時は車を一切入れないようにしているんですね。やたらに道がぐにゃぐにゃしてしまっていてね、ところどころにこういういぼを、道路にいぼをつくってありましてね、スピード出せないんですよ。車が入っても、とにかく走りにくいですね。真っすぐの、こういう碁盤の京都の町みたいにつくらないんですよ。ぐちゃぐちゃ、こういうふうにするんです。そういうのが、東京の

下町なんか、あれ自然発生的なものですから、自然にそうなっているんですよ、江戸時代から。ですからああいうの、それこそ保存しなくちゃいけないと私は思うんですけどね。

先ほど、萩原先生だったかなふれていましたけど、要するに都市のアメニティーというのは、住みよさというのは、何も道路をきれいにして、木を植えればいいっていうもんじゃないんですよ。でも、そういう昔からある都市を保存するというのは、言うはやすくしてなかなか難しいんですね。これも、東京は大分、昔からある江戸時代からのお堀を埋めちゃって高速道路をつかった、何だかんだ再開発やってビル建てちゃった、今さらもとに戻るといことは多分だめですね。日本が将来、お金ができて、やる事がなくなったら、埋めちゃった高速道路をもう一遍掘り返して、堀に戻すというのは、いい事業だと私はいつも言っているんですけどね。それでまた気が向いたら、また埋めて高速道路にして、また気が向いたら、また掘ってっていったら、これ未来永劫続くんですよ。環境に何の害も与えないです。どうせ日本もね、このままいきますとお金が余ってしょうがないんですよ。妙な土木工事やらないほうがいい。例えば、東京湾に橋かける、1本じゃ済まないから、もう一本かけるということになるでしょう、将来ね。そうすると、どんどんやっていく。昔の江戸時代の堀をもう一遍つくる、それに飽きたらまた埋める、そういうことをやっていますとね、いつまでたってもなくならない。大体単価わかっていますから、変な談合も起きないと思うんですけどね。

最初に私言いましたようにね、こういういい会場で皆さんの顔を見ながらばか話するというのは何て幸せだと、だんだん私幸せになってきた。

都市とは？

そもそも、都市というのがございますよね。都市って、よくわかんないですよ、考えてみると。これも後でちょっとご説明しますけどね。ざっと皆さん考えられて、都市というのは、要するに人間がやたら集まってきて、何か知らないけどすぐ

い経済力が集中して、機械に例えて言えば、一種の発電機がぶんぶん回っているようなものなんです。そういうものを想像します。これが、よくわかんないですけどね、これが都市かって言われたら、うん、都市かもしれない。これ農村と言われたら農村かもしれない。その程度の区別はつきますが、じゃ改めて都市って何ですかって言われると、ちょっと困っちゃいますね。

とにかく、こういう都市というやつがとめどなく発育したら、一体どうなっちゃうんだろうと。どうなっちゃうって、今のままどどんいだけでしてね、宮ヶ瀬ダムみたいなやつができたり、こういう東京都庁みたいなお化けみたいなビルがどっさりできたり、そういうことになるわけですね。それに従って、周りが少しずつ昔と変わってくるわけですね。行く行くは東京の下町なんて、どこかに消えてしまうわけですね。それはそうだ。

こういうふうに都市がとめどなく発育したら、一体どうなっちゃうんでしょう。どこかに終点があるんでしょうかという、皆さん心配になってきたんですね。終点があるということは、都市化がとまるということでしょう。つまり、そこで安定するわけでしょう。人の移動がなくなるわけでしょう。どけどけっていわれて、郊外に引っ越し人もないし、そういうことがなくなっちゃうわけですよ。神奈川県田舎から東京都庁に通っている人も多分いると思いますけど、苦労して電車に乗ってやってくる人もいなくなる。要するに、人の移動がなくなるわけでしょう。そういう都市化の安定、都市化がとまっちゃって安定したらいいのかと言われると、難しい問題ですよ。よくないんじゃないかな。難しい問題ですよ、これ。僕もこの間から考えているんですけどね、都市化が進展がとまったら、みんないいようなこと言いますが、都市化がとまっちゃったらどうなるんです。いろいろなこと言いますが、都市化がとまっちゃったらどうなるんです。いろいろなことが起きるんじゃないですかね。わかんない。皆さん、お考えください。私はよくわかんない。多分、つまんないまちになっちゃうんじゃないですかね。要するに、いわゆる活力がなくなっちゃうんです

ね。活力があったらいいのかと言われると、また都市化がどどん進むから、困っちゃう。どっちに行っても困っちゃうんですね。やっぱり、人間というのは業があるんですよ。要するに、生まれながらにのろわれているんですよ、人間って。

そんなことはともかくとして、どんどこ都市に集中しますと。そのわりにあれなんですよ、変なところ残っているんですよ。新宿あたりでも、ちょっと表のほうはビル。ビルに囲まれた真ん中のほうは、何かまだ1階か2階の家がぐっちゃりありましてね、あれはちょっとみっともない。みっともないというか土地不経済。ですから、再開発しようって、すぐ言い出すでしょう。これは建設省の喜びそうなことですけどね。

バンコクのまちというのは、行った方ありますか。バンコクのまちというのは、そういう典型的なまちなんですよ。道路に沿ってビルらしいものが建っていて、ブロックの中は沼地なんですよ、あれ。人が住んでいないんですよ。そういうふう。東京なんか沼地じゃなくて、つまんない家が、そういうところに住んでいる人いると申しわけないけど、そういう家に住んでいるんですね。住んでいる人はハッピーですよ、新宿まで近いしね、いいけれども、土地経済として大変よくないと思うわけですね。これは、かなり役人的発想かな。

都市がとめどなく発展するのはよくないから、都市に最適な規模ってあるんじゃないかというようなことを、また言う人がいるんですね、これも難しい考えですよ。最適規模の都市というように言う人がいるんですよ。最近。そういうものを書いた本もあるんですよ。都市には最適な規模がある。あんまりでかくなっちゃいけない。あんまりでかくなったらまずいだろうなと思いますよ。あんまりちこくてもまずいだろうなと思いますよ、財政力ないですからね。どっちがいい、適当なところがあるんじゃないかと、こういう説なんですけどね。いや、これ難しい問題ですよ。皆さん、これもお考えになってください。都市に最適規模というのはありそうなんですよ。頭で考えるとありそう。しかし、ほんとうにそういうものを、最適規模って、都市っていうのは人

間がつくっているものなんですよ。ところが、その最適規模の都市というやつを、人間がつくれるかと言われると、これはまた難しい問題なんですよ。これは、かなり考える必要がある。

いずれにしても、あまりよくわかんないんですよ。私も。あまりよくわからないけど、私の住んでいる藤沢の郊外を見てみますと、もとは百姓だったんですね、水飲み百姓。昔から水飲み百姓というのは、2反歩あると飯が食えたんですね。2反歩って、1反歩が300坪ですか、だから600坪ですね、2反歩。2反百姓って言いますね、水飲み百姓の代名詞ですけども。その人たちが一体どうなっちゃったかといいますと、坪、今うちの近所ですと200万ぐらいするんですよ。坪200万で、600坪掛けますと、幾らになると思います。きょう、家に帰って算術の得意な人は計算してみてください。そのお金で悠々暮らせるんですね。そのお金をどうするかというと、駅前にビルを建てるんですよ。貧乏人が入るわけです。私は貧乏人ですからね。貧乏人が入る。それから貧乏な店屋が入って。つまり、そういう地価、土地の値段に乗った人たちがいるんですね、ごく一部。私たち貧乏人はね、地価に乗った人々の奴隷になっているわけですよ、はっきり言って。怒らなくちゃいけない。こう言うと怒らなくちゃいけない、しょっちゅう怒っていると、頭はげちゃってきて、精神衛生上よくないんですけどね。かなり、これは過激な発言でございますからね。

いずれにしても、最適都市でも何でもいいですけどね、再開発でもいいけれども、都市がとめどなく発展していてもいいけれども、私たち、私を含めて皆さんの大部分は、こんなところに昼日中来るんだから、かなり貧乏人だと思うけど。貧乏人が安心して暮らせるまちなき意味ないですよ、はっきり言って。都市計画だ、緑だなんて言ったってね、要するに貧乏人が安心して暮らせるかどうかの問題なんだ。

いずれにしても、今までの土木とか建築なんかでやっている都市計画というのがあって、あれは、都市計画というのは字が違うんでしてね。都市というのは、いわゆるシティでしょう。トシ

計画っていても、あの人たち、私なんかの土木でも建築でも在来やってきたやつは、あれは紙に塗るって書く。塗料の「塗」に「紙」って書くんです。あれ、塗紙っていうんです。やたら計画を紙に書くでしょう。ですから、塗紙計画って。これ、僕が言ったんじゃないですよ。ある大学の偉い先生が本に書きましてね、あ、うめえこと言うって、私は感心しましてね。それで、土木や建築の紙に塗るほうの塗紙計画、なぜだめになっちゃったかといいますと、要するにここに建物をつくり、ここに飛行場をつくり、何だかんだって物をつくるんですよ。だめですよ、そんなもの。貧乏人はそこから追い出されるだけですから。

環境研究

ですから、私思うんだけど、こういう都市計画——今度はほんとうの都市計画ね。ほんとうの都市計画というのは、先ほど萩原先生もちょこりと言っておられたし、石田先生も最初のあいさつの中でちょこりと言っておられましたけれども、税制、税金ですね、ああいうことと全く離れて都市を論ずるということは、大体ナンセンスなんですよ。税制改革なんていうのは、言うだけむだでしてね。なかなか難しい問題ですね。ですから、都市というやつを物理的な観点だけで、物理的、化学的でも生物学的でもいいですよ、そういう理学部的な、工学部的な発想で議論したってだめなんですよ。ナンセンスなんですよ。僕はそう思っています。現在、環境関係の先生が一体どういうことを研究しているかといいますと、大体私は2つの方向に分かれるんじゃないかと思っていますですよ。非常にコンベンショナルな、ありきたりの研究をやっている方が多い。悪いことじゃないんですよ、これ。しょせんはコンベンショナルな——コンベンショナルって英語ありましたよね、ありきたりの研究をやっている。それはどういうことになっちゃうかといいますと、コンベンショナルな研究、例えば大気汚染というのがありますね。だんだん空気が悪くなってくる。日本だけじゃな

い、中国も原爆をやったと、ロシアもちょっと前にチェルノブイリで原子力発電所で変なほこりが来る。ですから、大気汚染をほんとうに防止するには、そういうことをやめさせなくちゃいけないし、そういうものをそもそも測定しなくちゃいけませんよね。ですから、コンベンショナルな環境研究というのは、究極のところはあれですよ、大気汚染ですと、地球表面をくまなく、1平方キロメートル当たり1カ所ずつ、大気のサンプラーを置くという話になるんですね。将来は。結局、それで何がわかるのかといいますと、フラックスといたしまして、要するに流れる量ですね。空気の流れとか、ごみの流れとか、ほこりの流れとか、そういうものをフラックスと言うんです、英語でね。フラックスの精密な測定ということに帰着するわけです。大抵のことは、それにいくんですよ。フラックスの精密測定にいくんです。何を目的にそういうことをするかというと、どこかの原子力発電所から出てくるちりを制御するにはどうだこうだ、要するにエフシェンシーの、効率の問題なんですよ、ある意味じゃ。

そもそも科学って、私の考え方でサイエンスというのは、そもそも2種類あると聞いていますね。1つはエフシェンシー、効率よくやろう、何かをね。例えば、素粒子論をさんざん研究して、原子爆弾つくっちゃったなんていうのは、要するにフラックスの精密測定と、あれ、要するに中性子ってニュートロンの流れを制御するんですからね、原子力発電所そうでしょう。そのバックにあるのがサイエンスでしょう。そういうのはエフシェンシーということですかね。何か効率をよくしようという研究ですよ。

もう一つは、何かものを分類しようというのがいい学問なんですよ。一番分類でいい学問の例は、例えば植物をとってきて分類する。いい学問ですよ。それから、カブトムシをとってきて分類する、チョウチョウをつかまえて分類する、いい学問ですよ。ああいうのはクラシフィケーション。チョウチョウやバッタやじゃおもしろくないですけどね。ですから分類しようって、例えば素粒子でいったら、何か知らない変な素粒子があるでし

よう。何か話によると、クォークとかいうのがあって。そういうのを分類しようというわけですね。そいつがどういう性質を持っているか。要するに分類するわけですね。そういう手の分類、英語で言うクラシフィケーションと言いますけどね、私は科学にはその2種類あると思っています。

そういう変なものを分類するっていうんで、それに関係する環境研究というやつは、たとえば英語で言いますとエソテリックって言葉があるんですよ。あまり聞きなれない言葉ですけどね、エソテリック。どういう意味かといいますと、これは非常に秘密で、仲間は少数で、仲間内だけがわかるようなことを言っている人たちのこと、そういうのはエソテリックと言う、名詞にするとエソテリアとかなんとか言うんですけどね、そういう英語があるんですよ。つまり、ひそひそやっているわけですね、皆にわかんないように。一番いい例は、例えば武者小路の千家でお茶をやるようなものですよ。秘伝は絶対教えない、一子相伝。そういうのはエソテリックって言うんですよ。なぜ、武者小路千家なんて例を出したかということ、ちょっと理由があるんですよ、私個人的なね。別に恨みがあるわけじゃないですよ。

例えば、環境研究でエソテリックな研究といったら、どういうことかといいますと、例えばマレー半島でマングローブの林が海岸べりにあると。あれが切られちゃってどうもよくない。マングローブの林を再生するにはどうしたらいいか、いろいろ研究してみよう。そういうのはかなりエソテリックな研究ですよ。よくわかんないですね。

例えば、日本に戻ってきて、例えばの話ですよ、琵琶湖のヘドロを分析して一体どうなっておりますと。江戸時代から積もっていますか、もっと昔から積もっているんですかね。ずっと研究して、いろいろ言うんですね。そういうエソテリックな研究というのは、つまり何か現象は、やかましく言うとか、何か記述できる現象を発見するということですね。そのような研究というのも一方にあるわけですね。

ですから、環境研究というのは、コンベンショ

ナルな研究とエソテリックな研究と、両方かみ合わせなくちゃだめなんです。片方だけじゃだめなんです。よくわかんないことが多いんですからね。例えば、酸性雨で木が枯れるなんて、あれもほんと、どういうメカニズムで木が枯れるんだろう。だれかがおしっこしたんじゃないかというじゃないんですよね。あれ、何かよくわかんないですよ、あれも。例えば、水道の水にトリハロメタンが入っている。あんなもの飲むとがんになっちゃう？ いや、よくわかっていないんですよ。あれ、トリハロメタン飲んで、がんになった人、今までいないんですからね。東京都水道局の水も、多分ちょっとは入っているかもしれませんが、あれどっさり飲んでがんになった人、いないですよ。ほかの原因でがんになるんですよ。たばこを吸ったり、新宿の変なところで酒飲んだり、変なもの食ったり、特にいけないのはラーメンだっていう説がありますけどね。そういうものを食うからがんになる。ですから、よくわかんないことが多いんですよ。そもそも、私たちがこうやって生きているということも、よくわかんないんです。なぜ生きているって、よくわかんない。ですから、わかんないこといっぱいありますからね。そういうエソテリックな研究というのは大事にしないでいいんですよ。

環境って、なんだ？

最初に申しましたように、環境ということはよくわかんないですよ。よくわかんないという理由は、これからちょっとご説明しようと思ってますけど、いずれにしても環境問題というのは、あまりロジカルな論理的な話じゃないんだと思います。ロジカルという意味は、理屈立てて議論するような問題じゃないと、環境問題というやつはね。理屈を立てて議論をするということは、一体どういうことになるかといいますと、何か理屈立てるというからには、初め前提が、何か前置きが必要わけでしょう、何か前置き。前置きを幾つか置いて、それからずっと議論をしていくわけですよ。どういう議論にするかという、要す

るに頭の中のいわゆるロジック、論理で議論するわけでしょう。ですから、そういうふうに環境というやつを初めに前提を置いて、それこそアリストテレスの三段論法じゃないですけども、大前提、中前提、小前提か、そういうようなことで議論するようなものじゃないんですね、これは。一応やってもいいでしょうけど。やってもいいでしょうけど、ほんとうかどうかわからない。ですから、あまりロジカルな、ヨーロッパ的なロジカルな話じゃないんだと私は思いますね。

エデュケーションというよりは、環境というやつは、そういうことを議論するということは、どっちかという教育的な面が強いんじゃないかと思えますね。要するに、英語で言うとエデュケーションな面が強いんだと思えますよ。エデュケーションというのは、皆さんよくご存じのように、教育というやつは、要するにもっともらしいことを教えるわけですよ。教育でやっていることというのは、ほんともっともらしいことをやるんです。ただ、そのもっともらしいことを教わってどうするかという、それどういうふうに判断するか、各自の判断ですからね。先生に教わったとおりのことをやったら、多分人間死んじますよ。エデュケーションというのはそういうものです。エデュケーションってそうでしょう、たばこを吸うな、酒飲むな、ラーメン食うな、変なところで水飲むなって教育するわけでしょう。そのとおりにやったら、人間どうなっちゃうかという、多分死んじゅうでしょうね。私なんか少なくともお酒は飲む、たばこは吸う、ラーメンは食わない、ラーメン嫌いですけどね、ですからちゃんと生きているんですよ。好きなことをやっていますから。ですから、エデュケーションというのは、要するに変な例を出して申しわけなかったんですけどね、エデュケーションというのは正しいことを教えるわけじゃないんですよ。もっともらしいことを教えるんですよ。英語で言うと、プロジェクトブルなことを教えるんですよ。そのプロジェクトブルなことを教わった人が、それをどういうふうに解釈して、どういうふうに行うか、それは聞いたほうの責任でしょう。そいつが、教わっ

たとりにやって死んじゃった、それは先生は責任持たないですよ。エデュケーションって、そういうものですよ。どうとるかは各人の勝手だ。

ところで現在は、その環境問題というやつを、どうも西洋かぶれか何かしたのか知りませんが、非常にロジカルに論理的に考えようとする傾向がありますね、現在。これはよくないと思いますよ。だって、ぎりぎりまで論理的に考えられない面がありますよ。この環境というのは。例えば、都市環境といったって、今までぐちゃぐちゃ言っていますように、ビル建てた、橋つくった、飛行場つくったって、そういうやつね。それ物理的な面があるんですね。それはいいですね。例えば、でっかいビルを建てると、周りに風が吹いて、人が吹き倒される、ちょっとぐあい悪いから何かしよう。ビルの真ん中に穴をあけようなんてビルありましたでしょう。そういうような物理的な面もある。しかし、都市環境というのは、もう一つ人間的な面があるんですね。このまち、住みいいとか、気分がいいとか、そういうあんまりロジカルじゃない話があるんですね。ですから、やっぱりかなりエデュケーションなんですよ。そういうことで教えられたことがほんとうに正しいかと言われると、よくわからない。それは各自の判断ですね。そういうことはあると思います。

ユニバーサル それで、そろそろ私にとっての本論に入りたいと思うんですけどね。まず、私、学校の先生をちょっとやっていますからね、ちょっと話は講義調になって申しわけないんですけど、都市とか環境とかそういうものというのは、要するに日本語に訳すと普通の、英語で言うとユニバーサルって言いますね。ギリシャ時代には、これはプラトンが発明したらしくて、アイデアと言いますね。そういう言葉なんですよ。例えば、このコップというやつね。これはユニバーサルなんですよ。このコップは特別なコップなんですよ。その特別なコップというのは、パティキュラーズと言います。1つの例なんです。だからコップ一般というと、これコップ一般の意味でコップと言いますと、これユニバーサルなんです。どうやってこれ定義するか、できない。コップというの

は、ガラスでできてて、丸くって、このくらいの高さがあって、水が入るんだ、それで定義できたかということ、いや、必ずしもできないんですね。ガラスでつくらなくたって、いや金属もある。アルミもある、鉄もある。そのぐらいで定義しておけばいいんですけども、いやいや、それでもまだ例外があるんですよ。金でつくっちゃった。それから、昔の人食い人種が、もう今はいないでしょうけどね、しゃれこうべをコップにしたとか、いろいろあるわけでしょう。ですから、今のコンピュータだって、コップというのは認識できないんですよ。人間は認識できるんですよ、これはコップだって。大抵のものを見せてもこれはコップになるかどうか認識できるんだけど、あれコンピュータは認識できないんですよ。そういうのはユニバーサルって言いますね。コップに限らず、水もそうなんですよ、ある意味じゃ。ユニバーサルなんです。

いつかテレビを見ていましたらね、自民党がまけちゃって、今与党の先生がテレビの討論会か何かで、自民党には族議員がどっさりいると。そうしたら自民党の先生が、族議員って何だ、おまえ定義してみると、こう言いましたけどね。定義できないですよ。族議員という言葉もユニバーサルですからね。ですから、今の与党の先生は、ユニバーサルということを知らなかったんですね。ですから、自民党の先生が、族議員って定義してみろ、おまえ言えないじゃないかというようなことを言ったとき、ちょっと、待って、それユニバーサルということで定義はできないんだ、ただし、族議員の顔を見れば、おまえは族議員ってことは言える、そう言えばよかったですよ。つまり、ギリシャ哲学をちゃんと勉強していないんだ。いや、ほんとうなんですよ。

ですから、環境というのもね、ユニバーサルですから、おまえ環境って説明しろと言ったってできない。ただ、環境がいいとか悪いとかって、それはすぐわかりますよ、人間ですから、このコップもね、コップだかどうか、一般的な定義はわからんけど、これはコップだということはみんな知っているわけだ。例えば、いいとか悪いとかい

うことも、一般的に定義しろと、弱っちゃいますよ、それ、わかんないもの。ただ、いいか悪いかということは判断できる。ユニバーサルとパティキュラーって、そういう意味なんですよ。

これは、ギリシャ哲学好きな方は何人かいらっしやるんじゃないかと思いますが、これはプラトンを読んで、ソクラテスの言ったことを読めばよくわかります。例えば、ソクラテスというのは、英語で言うとパーチャーって、徳ということを追分追求したんですね。それからユニバーサルという観念が出てきたわけですね。これがパーチャー、徳ですね。徳っていうのは一体何かって、わかんないです、そんなことは。ただ、この人は徳のある人っていうことは、すぐわかりますよ。逆に、こいつは人間のくずだというのも、すぐわかる。ですけど、徳というものはわからない。その徳の反対もわからない。そういうことが多いですよ。大抵の言葉はユニバーサルとパティキュラーの関係になっている。

適当ないわゆる役人用語で、ユニバーサルに腰だめ的な定義を下すことは可能です。列挙すればいいんです。こういうもんだ、こういうもんだ。例えば、このコップでね、これはガラスでできています、てっぺんが丸くて、このくらいの高さがあって、水が入るものですよって、適当にずっと枚挙的に列挙すればいいわけですね、条件を。そういう腰だめの定義で下すことは可能でございます。ただし、何べんも言いますように、それで固定しちゃって、そういうものだっていうふうに決めつけるのはよくないんです。環境というのは、緑があって何だかんだって、いっぱい定義を下しますでしょう。それはいいですよ、それはそれで間に合う。しかし、それを固定して考えちゃいけないんです。環境って、わかんないものを適当に、例えば東京都政の必要上定義する、それは構いませんよ。ただ、それでおしまいだって言っちゃいけないですよ。そういう性質がある。

ユニバーサルというものを固定的に定義しちゃって、おまえらそれ守らないとぶっ殺しちゃう。極端な例は、ヨーロッパの中世の神。神を定義したわけですよ。それに反論をしようものなら、

ステーキと言いまして、ステーキというのは杭ということですよ。ステーキドされたわけですよ。どういうことかということ、杭に結びつけて火をつけた。つまり、焼き殺されたんですね。英語でステーキというのは焼き殺すという意味があるのね。肉のステーキとはつづりが違いますからね。あれ、同じように焼くけど。

ですから、そういうふうにあるユニバーサルに対して、固定的に考えるということとはよくない。非常に害をなすわけですよ。都市というのもユニバーサルですからね、それに固定的にもう定義しちゃう、枚挙的な定義を途中で打ち切って、これですと言っちゃいけないんですよ。非常にフレキシブルに考えなくちゃいけんのね。そういうもんだということを書いていなくちゃいけない。

人間中心 今まで人間が環境を議論するとき、人間中心なんですよ、何だかんだ言たって。私たちが気持ちよければいいというのが環境でしょう。先ほど来、石田先生も萩原先生も、いや、人間中心じゃなくて万物、生きとし生ける物、エコシステムをつかってなんてなことを言うでしょう。ところがね、人間中心じゃなくて生きとし生ける物を全部ひっくるめると言いますと、これはえらい問題になっちゃいましてね、どこで線を引くんだというんですよ。エイズのビールスも、あれ生き物らしいんだよね。赤痢になったときの赤痢菌というのは生き物なんですよ。それ、おなかの中でエコシステムをつくられているんですね。どこで線を引くんだというんです。引けないんですよ、これ。いやいや、エイズのビールスはとりましょう、どうも大腸菌は無害だから置いといてやって、赤痢菌だけ、おまえだめ。そうやってうまくいくかということ、いけないんです。だって、エイズのビールスにしろ、赤痢菌にしろ、人間とエコシステムをつくられているんですから大事にしないでいいかということになるでしょう、理屈の上からは。で、困っちゃうんですよ。ですから、人間中心の考え方をやめて、生きとし生ける物がみんな仲よく暮らしましょうという考え方は、案外おかしな考えなんですよ。やっぱり人間中心にいかなくちゃいけません。人間中心だと、やっぱり

ちょっとぐあいが悪いところがあるから、もうちょっと範囲を広げましょう。そうすると、エイズビールスどうしてくれるんだって、エイズビールスが怒り出すでしょう、困っちゃう。この辺も、皆さんよく、きょう家に帰ったら、お考えになったほうがいいですね。

似たような問題に、成田問題というのがあるんですよ。成田空港問題というの。あれも、運輸省当局は、我々都民もそう思っていますけどね、ぜひ飛行場、滑走路をもう一本余計につくって便利にしてちょうだいというわけですね、飛行場をつくりたい。ところが、あそこに住んでいる反対派は、いやいやだめ、ここには絶対つくらせない。おれたち未来永劫百姓やるんだというんです。どこで妥協するんだというんです。絶対に妥協できないんですよ、これ。だって、片一方は百姓をやりたいって言っているんです、未来永劫。私が死んでも、あと子孫がずっとあそこで百姓をやりたい。運輸省プラス我々は、あそこに滑走路をふやしてちょうだいよと。どこで妥協するんだ。あの話は、白紙に戻して相談するって言っているんでしょう。白紙に戻して相談して、一体何ができるんですか。

ですから、人間中心の環境問題とか、成田問題というのは、根っこのところでロジック、論理、そういうところで非常に似たところがありましてね。現在、そういうロジックにならないようなロジック、先ほど萩原先生がちょこっと言っておられたけど、理屈じゃ割り切れないところで何か妥協しなきゃだめなようなところありますよね。よくわかんない。昔はもうどけどけ、どかないと刑務所に入れるというようなことをやって、例えば戦時中は軍用飛行場をつくりましたけどね。今はそういうことはできませんから、話合いましょう。あれ、未来永劫話し合ったらいいですね。そのうち、飛行機なんか乗んなくてもいい時代が来るかもしれませぬからね。そうら見ろと言うでしょうね、きつと。やっぱりつくらなくてよかったということになるかもしれませぬよ、それは。わかんない。話は環境問題も成田問題も似たところがありまして、わかんないところがありますな。

あんまりこういう手のことを考えると、頭がは

げますから考えないほうがいい。私なんか、あまり考えないから、結構髪の毛、はげない。これはあれですよ、アデランスじゃないですよ、ちゃんとしたもとの毛ですから。わかんないことは考えるもんじゃない。

都市に生きる

最後に、あと10分ほどございますから、ちょっと最後のお話をしたいと思います。大体、私思うんだけど、人間ってこうやってしゃべっていると結構かっこいいこと言っていますけどね、心の裏側というか底には、結構皆さんも私も含めて、考えていることはいろいろあるんですよ。人にはいえないことを考えているわけですよ。例えば、きょう家帰って、亭主のために何つくってやろうか、奥さん考えている。男のほうは、きょう家帰って、あの料理の下手な女房、何つくりやがるんだって考えているわけでしょう。要するに、非常にどろどろしたことを考えているんですよ、人間ってやつは。口じゃきれいなことを言ってますよ。これは、社会を維持するためにきれいなことを言っているんでありまして、どろどろしたことをすっかり言っちゃったら社会になりませぬものね、まあ、大変だ。社会つぶれちゃうよね。いわゆる都市環境、つぶれちゃうわね。

きれいごとではない面があるんですね、人間の生活というのは。そういうきれいごとではない人間の生活を支えるような都市というのは、ほんとうは要るんですよ、ほんとうのところ言うと。私が、やはりニューヨークに5ヵ月ほどいたんですけどね。あれ何だったかな、何かの雑誌を見ていたら、漫画がありましてね。おもしろい漫画なんです。ある町でトシ計画、さっき言った紙に塗るほうの塗紙計画ね、立派な塗紙計画ができた。そいつを持って、市長のところに見せに行った、その塗紙計画の技師がね。そうしたら、市長いわく、「マガーのいるところはどこだ」と、こう言うんですよ。つまり、マガーというのはピストル持って、人からお金を巻き上げたりする悪いのがいるんですよ、アメリカに。こういうようにつけたカップ

を、あれマグって言うんですけどね、マガーって言うとそっちになるわけね。同じつづりですよ。そのマガーのいる場所がない。つまり、適当に草むらとか、適当に物陰とか、そういうものない都市計画はだめと、こう漫画の市長は言うわけね。都市計画って、そういうものもほんとうは考えなくちゃいけないんですよ。きれいさっぱりしちゃいますと、どうなっちゃうかという、新宿の駅からここに来る間の地下道ね。横っちょに、段ボール箱に寝ている人がいるでしょう。あれは、本来東京都庁で、ちゃんとああいう人たちのいる場所をつくらなくちゃいけないんですよ。あの地下道を通るたびに臭いんですよ。ですから、東京都庁は、ああいう人たちの居る場所を考えなかったのね、すっからかんにきれいにしちゃって。日本にはマガーいませんからね。マガーのいる場所はいいんですけど、そういうのもないとね、ああいう人たち行くところがなくなっちゃうんです。よ。それで、ああいう大通りに堂々と住むわけですね。そういうことになっちゃうわけ。要するに、都市生活の裏側には非常にどろどろしたものがあるということですよ。

これ、なぜそんなことを私申し上げるかといいますと、先ほどちょっとギリシャとかゾロアスター教の話が出ましたから、ちょっと申し上げますけどね。1850年生まれで1928年に亡くなったケンブリッジ大学で最初の女性の学者っていうのがいるんですよ。その人の前は、ケンブリッジは女が入れなかったんですね。その第1回の女性の学者というのがいましてね、名前がジェーン・ハリスンというんですよ。覚えやすいですけどね、ジェーン・ハリスンさんという人がいて、その人があるとき思いついたわけですね。ギリシャの神殿というのは、何かパルテノンの神殿って言って、青い空で青い海で何か柱が突っ立って、きれいなお宮でしょう、要するに。そういうオリンポスの神を祭るような、非常に表づらきれいですよね。東京都庁のこの庁舎を見るようなもんですよ、非常にきれいなもんです。そういう、それは宗教ですよ。そういう宗教の名前がついていまして、オリンピック信仰というんですよ、きれいですよ。

どうも、古い土器とか、何かの彫り物、レプリカとか見えていますとね、どうもオリンピックだけじゃなさそうだと。何かそこにどろどろしたのものがあろうかということに気がついたんですね。オリンピックの反対語が、ターニックっていう変てこな英語があるんですよ。つづり言うと面倒くさいですけどね、ターニックという英語が。それは、要するに暗い面があって、原始的で、おどろおどろしくて神秘的だという意味なんですよ。もう一つは今言いましたようにオリンピックって言って、堂々としてましてね、アポロの神ですからね、堂々としていて。あれ、首がちょん切れても、アポロというのはきれいですからね。アポロ、あるでしょう、石ころの像が。威厳があるんですね。超然としているわけです。そういうのが一方にあって、オリンピック。ターニックというのは別にある。日本で言えば、昔からの陰陽道とか何かそういうものですよ、きっと。どこの民族にもあるみたいですね。そういう裏にどろどろしたものがあるんですね。

で、どうなるんだと言われると困っちゃうんですけどね。これは、ジェーン・ハリスンさんの発見だと言われてますけどね。もっとも、よくよく調べてみると前任者はいるんですけどね。でも、ジェーン・ハリスンさんもあれですよ、ギリシャの宗教研究の序論とでも言うんですかね、結構有名な本があるんです。

というわけで、宗教って——宗教ってあんまり言いたくないんですけど、人間の考えることっていうのはどろどろしたものと、こういう都庁に代表されるようなからっとしたオリンピック的なものと両方あるみたいですね、どうも。ですから、単純に環境問題というやつを何かに規定して、こうだと言うのは非常に危険ですね。

いずれにしても、もう時間もなくなりましたから、もうおしまいにいたしますけれど、人間というのは1人の人間でも表づらと裏側があるし、いろいろな種類があるんですね。いろいろな多様な人々がいる。そういう多様な人々が多様に暮らせる都市、それが一番望ましい都市ですね。これから都市研究とかいうんでしたら、そういう多様な人が

多様に暮らせる都市って、一体どうやってつくったらいんだろうかと、そういうようなことを僕は研究すべきだと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

(休憩)

4. 地球環境保全と環境対策

【司会】 それでは、3番目の講演を始めたいと思います。3番目は、「地球環境保全と環境政策」と題しまして、立正大学経済学部教授、また地球環境財団の理事をなさっております福岡克也先生にお願いしたいと思います。福岡先生は、環境経済、エコロジー経済、特に森林、緑の問題、地球環境問題と幅広く環境問題を研究なさっております。それでは先生、よろしく願いいたします。

【福岡】 ただいまご紹介いただきました福岡でございます。きょうは、東京都立大学の都市研究センター主催の公開講座ということで、ご協力させていただいたんですが、都立大学は前に八雲にあったときに、私は昭和48年から平成元年まで経済学部の経済学の授業を、非常勤講師ですが、担当させていただきまして、本務のほかの兼務としてお仕事に参加させていただいたことがあります。それから、私自身が東京都の農林漁業審議会の審議委員をやっておりまして、緑の問題の審議に参加をしておりますが、このところ数年ずっと多忙で、審議委員なんですけど、残念ながら、私の学部長会議のときに審議会をやるものですから、仲々出席することができません。実は東京都庁の建物も、きょう初めて拝見させていただいて、よくもこんな膨大なものをつくったなということで、その構想をもう一回知事に問い直してみたいなというように思ったぐらいであります。まさに20世紀の大量集中型の文明の象徴的シンボル、まさに今世紀最後のそういうものをつくったんじゃないか。これからこういうものはできないんじゃないか、こういうものは成り立たないんじゃないかということです。その意味で文化的価値として大きいんじゃないか。将来、二十何世紀になったときに、よくも20世紀の人間はこんな大胆なことを考

えたなという、その材料としてこれは挙げられると思います。まさに大変な文化財をつくってくれたと。その意味においては、後世に我々の20世紀の文明がどんなものであったかということを残すのにちょうどいいのではないか、それ以外の価値はないのではないかというふうに拝見させていただいたわけでございます。

東京の緑

ところで、私はそれほど過激なことを言うようなつもりで出てきたわけではございません。東京都の緑の問題というのは、今をさかのぼりまして、昭和47年、西暦に直すと1972年ということになります。ちょうどストックホルムで第1回の地球サミット、「人間と環境に関する国際会議」が開かれた年でございますが、その年あたりから東京都のお仕事には参加させていただきました。それは、緑をいかにして保全するかという仕事であります。緑を保全するという前に、先ほどのお話もずっとたび重なってあるように、地価というものが非常に高くなって、そこに集中的な経済的効果をねらった投資が行われ、バブルが生まれ、土地の価格というのは上がってきたのでした。そういう中で、土地をいかにして使おうかということで、土地の分捕り合戦をやった。その中で緑というものが、非常に保ちにくいものになっていったわけです。

昭和47年でどういうことをやったのかということ、47年からちょうど50年にかけて、次のことをやりました。それは、1つは美濃部都知事のところに、シビルミニマムという言葉が実ははやっていたのです。行政のコンセプトとしてシビルミニマムという言葉がありました。多分、東京都の引越しのときに、そういう古いファイルは全部焼却処分で、今や埋め立てになっているかだろうと思うんですけども、そのファイルがもしあれば非常にいいんですけどもなければ私のところに来ていただければ、ファイルではありませんけれども、報告書がありますので、お見せします。そこでは2基準点方式、つまり2つの基準点というのがございまして、それはどうなのかといえます

と、まず各地域で現在どうなっているのということを押さえるわけですね。それで、次にその平均値を押さえるんです。これはどういう論理かということになると、非常に問題がありますけれども、何かに基準を求めるといって平均値を求める。東京都の平均値なんですからね、これは大変なものでございます。檜原村や青梅みたいなところがあるかと思えば、足立区みないなところもあるわけで、ずっと東京都というには幅は広いですから。そういう地域の平均などというのは、考えてみたら難しい基準ではあるのです。しかし、みんなが、東京都民の1人1人が今のくらいの緑と、どのくらいの空間をもっているのか。ちょっと自由に息を抜けるような空間をどのくらい持っているのだろうかということを、まず現実には押さえます。その押さえた上で、それぞれ目黒区はどうなっているのと、大田区はどうなっているの、品川区はどうなっている、そして三鷹はどうなっているというふうに、市町村別ぐらいに押さえて、その格差を出すわけです。東京というのは、人工衛星や宇宙衛星や飛行機などから見ていて、ああ、あそこが東京かということ、大体わかるわけですね。その東京は全体として、都民1人当たり、どのくらいの緑地を持ち、どのくらいの余裕時間を持ち、どのくらいの家に住んでいるかということが判ります。これを平均値として出し、たとえば目黒区は全体の平均と比べて、どこがよくて、どこが悪いというようなことをつかまえておくというようなことをやったわけです。シビルミニマムというのはどういうふうに出てきたかということ、少なくとも平均値水準というものをとらえてみて、その平均値水準より低いものをできるだけ上へ上げるような方向に持っていくというわけです。これは項目が幾つかありますから、その幾つかある項目の中で、個々に、1つずつの項目をできるだけ平均値に近づけるようなことをやろうとしたのです。それ自体も意味があるのかということになりますと、なかなか合理的な説明は難しい。しかし、極端に言いますと、緑が非常に少ないという地域に関して言えば、緑地の保全というものは重要事項として考えていったらどうかというような発想につな

がっていったわけです。この2基準点方式と、それからシビルミニマムという発想が、行政の中にコンセプトとして入り込んできますと、シビルミニマムというものに反するか反しないかという、この辺がひとり歩きし始めますけれども、その基準でもって、一応政策のプライオリティーを決めよう、重点を決めようというふうになっていくわけです。

私どもは、まず東京都の全体を500メートルぐらいのメッシュでずっと刻みました。メッシュというのは四角の碁盤の目みたいなもので、その刻んだ刻み目の1つ1つにデータをインプットして分析したのです。まず農地、森林、それから宅地、それから市街化調整区域、工業地域、商業地域、学校、公園、こういった押さえ方をした。土地利用として考えられるすべての姿を、大体当てはめまして、その実績を数値化した。さらにそれを平均値化したということをやったわけです。

それでわかったことは、いかに都市開発というものが経済的な法則に大体準じて行われていたかということがわかったということなわけです。確かに人間のやっていることは不合理なものを含みながら、しかし、おおよそ合理的なものを求めていくという傾向があります。全く純粹に合理的なものを教条主義的に追求するのではなくて、合理的な基準をある程度描きながら、その合理的基準に対しては不合理なものを含みながらもいかに生きていくかということか、そういうようなことを考えてやっているんだということがよくわかったのです。

どういうことがわかったかということ、これは当たり前なことなんです。JRの山手線、何かテレビの広告にぐるっと回る山手線、真ん中を通るは中央線などと言っているんですけど、中央線や山手線のターミナル駅から出てくる私鉄の路線に沿って、ブドウの房みたいにならば一と都市が広がっていくのです。中心から大体10キロ、20キロ、30キロ、40キロ、50キロと円周を引いていきますと、タコの手みたいな感じで延びていくんですね。それは、全部ターミナル駅を中心とした交通アクセスの距離によって、時間距離によって地価

のランクがずっと決まっていくというふうな感じで出てきたわけです。その中で私たちは、できるだけシビルミニマムという要素と、それから地価の法則という経済的なルールとを対比しました。高いところと安いところの経済性の差というものでランクづけがされているような地価の動きがあり、両方見ながら分析していきますと、いろいろな変数に変換しました。多数の変数を解析するためには多変量解析という方法があるのですが、多変量解析をやってみますと非常におもしろい結果が出てきたわけです。

それは、こういうことなんです。いろいろなことを言ってしまったらわかりにくいでしょうから、簡単なことを言います。東京の真ん中から始めて、いわゆる機能的な工業都市みたいな部分と、それからいわゆる公共的な政治都市みたいな部分とがあって、それから商業都市があって、それから住宅都市があって、それがずっと住宅、商業、住宅、商業、工業などを含みながら、雑多にずっと衛星都市みたいにしながら外側へ広がって、またつながり、広がっていくんですね。一極集中というより、複極分散のネットワークに見えるのです。まず、どういうふうに土地をつぶしていつているのかというと、まず宅地の安いところを買っていつつぶしていく。その次に農地を買っていくんですが、農地は転用の制限がありますから、農地をスキップして山林に行くわけですね。山林に関して言えば、山林税制というものは非常に矛盾を持っているわけです。特に、生産緑地としてしまえば農地は残るんですけども、森林は必ずしも生産緑地にならないために切られてしまって、残っている緑のところ、緑のところへと、宅地だとか工業用地が入ってくる。農地をある程度崩し、ある程度農地を残しながら、スキップして山林をつぶし、そしてさらに飛び火するようにして次のまた離れた山林に飛び火するという形で動いているのが特徴です。

そういうことで、地価の安いところ、安いところへとまずねらって、収益を図っていくというようになっていたものですから、東京都でもって、我々が公共的にやるべき緑地の保全というのとは

こかという、1つは農地転用の制限というのは結構だけれども、農地と農地の間に入る森林を、相続税の支払いのために売るとか、あるいは投機的に売るということに問題があったのです。特に緑地の分布上、そこにあったほうがみんなが安らぎを感じ、そしてまたある程度のシビルミニマムの条件を満たすなというところを重点的に保全していかななくてはならないということになったと思います。そこを東京都が買い上げていくという、こういう政策をとっていくことが必要じゃないかということになったのです。フィンガープラン計画だとか保安林整備計画というものを提案して、私は委員長だったのでですけども提案して、買っていくということになったわけです。

それで、フィンガープランとかそういうプランでは、一般の個人では買い上げられないという土地について、しかも森林について買っていくという、公共取得型のプランを持ってやっていったということがあるわけです。ただ財源が限界があり、ほんとうに徹夜の委員会を何回かやって考えたことがあります。もう昔の古い思い出になりますけれども、東京都知事が、台風が来て青梅や桜原の山林がみんな倒れたときに視察されて、こんな状態がどうして起きるんだと、これは手入れが悪いからだ、森林に手入れ資金を出そうというので、21世紀緑プランという諮問委員会をつくられました。私もその文章を書いたんです。そういう立場で保全できるものを保全する財源措置を講じ、基金でもつくってやりましょうということ提案したのです。そこで1,000億円とか2,000億円のお金が投入されてくれば、私は非常によくなってくると思ったのです。

あとは公社をつくり、実際に取得をするという方向で進めることになっていったと思います。ぜひ、もうちょっと財源をふやして取得をしてほしいと思っているわけです。

その時期が過ぎて、現在となりますと、一体緑を守る基準というのはあるのかということになると、私はないのではないかと心配しています。その1つは、ごみの焼却場と処理場の問題です。緑としては、例えば青梅とか、それから高尾の周辺と

か、こういったところの山を都民がアクセスできる緑として守っていくということは、これはできると思いますから、できるだけ皆さんが都民の森として遊びに行かれることが非常にいいと思います。それからまた、近くの森でも、例えば目黒の旧林業試験場の森とか、新宿御苑なども市民の公園としてもっと開放できるような形に持っていくべきだし、一番いいのは皇居の緑ですね。あの皇居周辺をぜひ皆さんの公園として、これから生かしていただきたい。

緑地というのは、まだ都内には幾つも残っているわけですから、こういうのをよく利用するということです。例えば、林業試験場などは、せっかくいい森が残っているのに、実際には手を加えて、かなりおかしな状態の公園にしていないとは限らないので、ああいったところをもう少し自然を残すような形にしたほうがいいのではないかとこのように今、思っているわけです。

ごみ処理場の問題というのも非常に大きな問題だと思ふのです。そういった意味では、一体あと数年間ぐらいで満杯になるごみの捨て場をどこに置くのといった問題、日の出町でもって管理型の塩化ビニール1.5ミリを張りめぐらしたような、ああいった管理型の処理場をつくって間に合わせられるのか不安です。ああいうものだけでほんとうにいいんですかということ。それからもう一つは、埋め立てさえすればいいということで、東京湾に何でも持っていけばいいのかという問題があります。それから、各区役所ごとにごみの焼却場をつくって、そこで処理すべきだという考えも出てきています。こうした問題の処理と緑地問題も無関係ではありません。

経済活動の根底をなす物質循環系の基本構造

こういったような考え方のもとでは一体どこにあるかということですが、東京から離れ全体として考えたときに、一体私たちの経済生活というのはどうなのかということ、きちんと見直してみるときになってきているのではないかと思いますね。

採取の時代 まず、「はじめに」というところな

のですけれども、私は経済学を学び、農学を学んでいる者ですので申し上げますが、大体人類が生まれたのは300万年ぐらい前だというふうに言われているわけです。現在のような人間ができたのは、大体3万年ぐらい前だろうと、これも推定でございますが。その人間が、少なくとも、今から数千年ぐらい前までにやっていた経済生活というのは、採取、物を採掘して採集して取る、採取の時代です。この採取の時代は、次のような生活をしていたと思うのです。まず、皆さん、頭の中で、自然というものを1つの資産と、財産というふうに考えてください。自然資本と言ったり、キャピタル・オブ・ネイチャーだとか、いろいろな言い方がありますが、自然の資産と考えてください。この自然の資産から毎年毎年生み出される収益があります。どうなのかというと、例えば木が成長するとか、魚がふえるとか、あるいは木の実がなるとか穀物が実るとか、そういった自然の恵沢——恵みの沢と書きます、自然の恵沢があります。この資本のことをストックと言いますね。そして、そこから毎年つくられるものをフロー、流れ、収益と、こういうふうに言うわけです。このフローの大きさというものは、自然の状態で決まるわけなんですけれども、この自然の恵沢を採取の時代には、この恵沢の範囲内で少なくとも採取をしていたわけです。この恵沢の大きさをZというふうに考えてみます。そして、取ってくるほうを、後の記号との関係がありますから、R——リソース、資源——Rと考えていただきたいと思ふます。ZとRです。ZとRを比べたときに、採取の時代ではZのほうがRより大きいと。人間は、Zの範囲内でRを取っていたという時代を長く継続してきたわけです。

農耕の時代 さらに、その次になってくるわけです。農耕の時代というのはどうなのか、農業というのは、どういふふうに皆さん考えておられるか知りませんが、農耕というのは、自然の持っている可能性を最大限に引き出すというのが農耕の本質です。しかし、それはZという恵沢の範囲内、最大限Zまで取るが、Zを超えることはしないということをお原則としていたわけです。農業とい

うものは、どういうふうに使われているか、いろいろありますね。アメリカ農業というのは自然破壊だと言われます。日本農業はリサイクル的な農業だと、こう言われますが、アメリカ農業をあえて言えば、工業的な農業ですね、ほんとうの農業と言えるのかと思われまます。鉱山業みたいに、ただ採取しているだけの農業じゃないかというふうなことも言えないではないかと思うんです。ところが、日本のリサイクル農業などと言いましたら、これは自然の恵沢を、常にその恵沢の範囲内で最大限に可能性を引き出している。今、サステナブルということをよく言いますね、持続的発展とか。何が持続だというわけです。つながっていれば何でも持続かという、そうではないと思います。やっぱりZという自然の恵沢の範囲内で、最大限にそれをふやしながら生きていって、それを超えないということ、これが節度だと思います。こういう技術を持っているのが農業なのですね。

工業の時代 ところが、農業の時代に、我々は物々交換をやるようになり、貨幣を生み出して、交換の手段としてのお金というものの合理性、貨幣的合理性というものを確立してしまったわけです。お金というのは、1つは交換の手段ですが、貯蓄の手段にもなる、投資の手段にもなってくるわけです。一方では科学が進歩しました。私の科学のとらえ方はどうかというと、科学は物質の真理だとか、すべての真理についての分析をやったノウハウだと思わなければならない、技術というのは、資本というものに対して最も利潤をマキシマムにする、つまりプロフィットを最大にするような、それに役立つような科学上のノウハウを引き出してきて、それを選択して技術を組立てます。そういう技術が発展する中で、いわゆる生産性というのが大切になるわけです。そうしますと、生産性が大きくなった段階で、既に自然の恵沢を超えた採取が可能になってきます。Rというものは、Zを超えるばかりでなくて、Zを超えた分は先ほど言った資本ストックの、自然の元手の部分までもどんどん切り裂いていくわけでありまます。時間の概念というものを、現在から将来、それも1,000年とか

1万年というタームでとった場合、地球の変化というのは相当大きくなってきますが、1年、10年、100年のタームではあまり大きな変化は起きませんから、さしあたり我々は自然のストックを食いつぶしていても、その報いは直接私たちにあしたから受けるというものではないと考えます。しかしこれが1000年、2000年たった場合、その報いは当然受けるわけでありまして、自然の状況が変わるわけですから、当然その自然の状況に合わせている生物は、変わった自然の条件のもとでは生存できなくなるわけでありまます。適応の能力の限界を越した場合には、適応できなくなるわけですから。長い生命の持続を考えた場合、現在の環境の中で、特に自然の資本ストックを食いつぶしていくという動きについては、これは私どもは、我々の持てるDNAの能力の過大なことを信じない限りは、絶対に現在のノウハウでは危険な状態をつくり出すだろうという確率は高いと考えざるを得ないわけですね。

したがって、持続的ということを考えていなくても、少なくとも工業の時代で我々のやってきたものは、巨大なエネルギーの利用だとか、あるいはこういった巨大な都市の建設ということで、人間の力をフルに空に向かって、天に向かって示していったという誇りがあります。しかし人間の行為の本質というのは、やはり工業の時代で1つの矛盾といえますか、自然の恵沢を超えて、自然のストックを食いつぶしながら、生きてきたのだということです。環境問題が生じてくるのは、少なくともその人間が工業の時代でもって、自然が自律的にコントロールする能力を損ない、Zを超え、地球の自動的な調整能力を変化させているということです。

そういう危機的状況に対する人間の問題意識、あるいは危機意識が、どの程度のものだろうかということが気になります。これは神ならぬ人間の判断することですから、やはり科学的に正確な情報をつかまなきゃいけない。その意味では、先ほど川口先生のお話にあったように、1つの科学的方法の中で観測をし、あるいは研究を続けるわけでありまます、その本来の目的がどこにあるの

かといえば、やはり自然の状態というものを情報化し、実態としてとらえるというところに人間の欲求があると思います。これを知ったときに、プライオリティーというものがはっきりした形で決まってくるわけであります。しかしそれが決まらないまでは何も言えないというのではまた問題だと思います。例えば、物によっても違いますけれども、熱帯雨林の破壊なんていうような場合には、これは完全に先ほど言った自然の恵沢、自然の能力の範囲内のZを超えた伐採は、全部森林を破滅させています。Zを超えない伐採については、再生が保証されています。この辺の最低限の生態系に対する知識とか考え方とか技術は、少なくとも使ってほしい、使うべきじゃないだろうかと思います。それが例えば貯水量だとか、あるいは酸素の供給量とか、炭酸ガスの吸収量とか、土砂の流出量だとか、土壌の保全量に影響してくるわけですから、当然、その周辺の地域社会のリサイクルを妨げ、健全な生産のリサイクルを妨げるということになるわけです。当然、人間がみずから切った伐採によって、人間自身を駆逐してしまうということになるわけですね。そういう誤りはなくする必要があります。例えば都市化が進むという場合に、都市化が進んだオルターナティブとして空調をやったり、あるいは都市交通を便利にしたり、さまざまな栄養物を添加物も含めて食べさせることになる。

リサイクルシステムの必要性 今は、朝起きて、お茶1杯飲んで、遅刻しないように数百万の県外の人がみんな東京都に集まってきています。しかし、その人々で東京では巨大な大便の量が排出されて、処理費は全部東京都民が負担しているという、こういう構造になっているわけですね。そして、給料をいただいて、みんな帰って、せいせいした思いで鎌倉や藤沢で生活をしているということになっているわけです。つまり、物の出入りがあるわけなんですけれども、その物の出入りに対して、何の国境も何もないものですから、そういうことについてのコストの概念とか、それをだれが責任持つかということがないわけです。

我々のここまで来た経済活動を構成している要素は何かというと、1つは企業なんですね。サブラ

イサイド、供給サイドの1つは企業です。それに対して消費者がある。そして、最近ではリサイクルというシステムが1つ必要になってきています。単純に言ってその3つのシステムが必要になってきている。資本主義という経済構造だとか、皆さんがこれが一番いいんだと思っている市場のシステムというのは、先ほど言った交換経済から市場が生まれて、その市場の中で一方で貨幣とか資本とかを生み出しながらマーケットをつくってきた。そのマーケットが、実は資源を最も合理的に分散させたり、集中させたりする働きを持っていると信じ込んでいるわけです。自由というのは、そういった市場のシステムを支える基本的な哲学だ。自由というものがあって、初めてそこで市場機構がうまく動くんだと考えるぐらいに市場のシステムというものを大事にし、また、それに依拠しながら生きていこうというふうになっているわけですね。貨幣のシステム、貨幣の合理性というものをそこで実現する仕組みとして、最も合理的だろうと考えられていたからです。

ところが、市場には失敗があって、例えば公害を発生させるとか、失業を生むとか、景気の変動が起きるとか、さまざまな貧富の差を拡大するとか、そういうことがあったから、20世紀に入ってからケインズ以来、経済学、経済政策の中で財政や金融のコントロールをしながら貧富の差をなくすために税金を利用した。それから、失業をなくすために完全雇用を考えるような雇用政策を考える、失業した場合に保険をつける。あるいは、公害に対しては公害防止基本法で公害が出ないように防ぐ。水俣病みたいに12億円のお金を使い損なったために、980億円の補償費を払わなきゃならんということを今世紀でやっているわけです、我々は。そういうことを全部防ぐということが大事で、それは市場の失敗だから、公共的なシステムでそれを補っていこうということはありません。行政とか政策というものがそういった公共システムとして生まれてきているということが言えます。しかし、やはり基本的な行動は、市、企業と消費者とリサイクル部門というものが、1つ経済活動の中心にあるわけですから、これらが有機的に動かなく

てはならないと思います。

環境コストの負担

先ほど言ったように、人類は採取時代から、まず自然から資源を取ってくるわけです。今日本では、大体約17億トンぐらいの資源を使っています。そのうち6億トンは外国から輸入しているわけで、輸出しているものが大体物量約8,000万トンから1億トンぐらいです。ですから、結局輸入した資源6億トンのうち、物量計算では多目に見て約1億トン出たとしても、5億トンはこの国内に残っているわけです。この処理は日本でしなきゃならない。しかも一方では貿易収支の黒字が残っているわけです。他方では、外国から毎年累積してごみ5億トン、もう既に20年で100億トンぐらいのごみが、ほんとうはこの国内に累積しているわけです。これは在庫品になっていますからね。すぐに粗大ごみなんかになりませんから、今のところごみに出るまで時間がかかります。ライフサイクルを延ばして、なるべくごみになるまでの時間を延ばして、使う時間を延ばし、ごみになる分を少なくしようということでやっているわけです。とにかくそういうマイナスの在庫があるわけです。いずれは、これはごみになります。企業が資源を取って、そしてそれを生産加工するという事なんですけど、従来は採取するコストだけが企業のコストだったんですが、1992年のリオデジャネイロ、私どもも行きましたが、その国際会議の国際的なコンセンサスの1つとしては、資源を取るために他国の自然を破壊した場合、その自然を再生すること、また再生するコスト、支払いを必ずしなきゃならないということを言っているわけです。それから、公害を生じた場合は、それに対する補償は必ずしなきゃならないということを言っているわけです。これは、国際的な強制的な手段がそろわなければなかなかできませんが、徐々に毒ガス防止と同じように、あるいは核禁止と同じように、国際的な世論になって強まっていった場合はそうなります。既に企業は本格的に途上国における資源採取に対しては、採取した補償費を払わなければならない

ということになっております。これは、従来のように採取コストに対して環境コストと言うべきコストが、そこに加えられているということになります。

企業一産業廃棄物の処理 したがって、今までのように安い資源を買うことはなくなります。たまたま円高差益があって、我々は安い資源を買っておりますけれども、もう資源価格というもの、環境コストを考えた場合には非常に高くなると考えなければならないわけですね。もちろん、前提としては、そういうシステムがきちっと確立されなければなりません、でたらめなルールでやっているような貿易はできなくなる。自然を破壊するような輸出は禁止しなきゃならないというふうに国際世論が高まってきていますから、非常にシビアになりつつあります。資源価格が高くなるからこそ、企業は企業内において廃棄物をゼロにするとか、あるいはリサイクルということによって、企業内における環境コストを引き下げるとことを考えていかなければならないのです。環境問題に対応するというと、企業はすぐ公害防止装置をつけて、コストがかかるんだという観念が強いと思います。それは、公害防止装置をつけるという点においてはコストがかかるわけですが、しかし一方では取った資源について、これをどう処理するかということによって、これは環境コストを下げることもなってくる。この辺のコスト概念が企業の中ではっきりと変わっていなければならぬし、また変わりつつあるということを示し上げていいと思います。

そうしますと、例えばNECのように廃棄物はゼロにしていこうと、酸とかアルカリのような排出物は全部硫酸礬土とか、石こうとかつくって売ってしまおうというようなところまで来ています。もちろん、フロンをやめるなんていうことは当然だというふうに考えてやっているということなのです。

そして、今度は産業廃棄物は産業廃棄物処理法に基づいて、排出された場合に、企業の責任において費用負担をして排出するということであります。そしてなおかつ、自社処理以外は産業廃棄物

処理業者を通して出すわけですが、その産業廃棄物処理業者がごみの最終処分場で公害を発生させるような事態が起きた場合には、その公害物質の性質にもよりますけれども、さかのぼって排出した企業に責任が問われるというふうにもなっているわけです。そうなりますと、今度は廃棄物処理場を確保することから、企業にとっては重大なコストの一部になってくるわけでありまして、産業廃棄物処理業者とどのような話し合いのもとで最終処理場までも設定するかということは、今や企業にとって大問題になっているわけです。例えば、建設産業は、廃棄物の処理とか、そういったものをどうするかという問題、特に建設廃材問題に悩んでいる。建設廃材をストレートに処理場に持っていった方がいいのかということになりますと、だめだと。4割以上はリサイクル的なものにしなきゃならないということになりますと、例えばこの東京都のビルを壊して、21世紀の半ばに新しいものをつくるときには、この瓦れきの山をそのまま東京湾に捨てるのではなくて、ここで再生加工して、新しい材料としてそれを生かしていくという、こういう処理が求められることになるわけです。そうなりますと、ここで再生のための処理コストだとかエネルギーがかかってくるわけで、そこまで追い詰められて検討をしているということになってきますね。再資源化法などつまらぬ法律をつくったというふうには考えられる方もいるでしょう。しかし、建物を壊して現場でもって再生させてつくるコストと、新しいコンクリートのコストとの間の関係で建設コストが決まってくるわけで、当然破砕する技術、あるいはそれを再生する技術が進めば、限界生産費は落とすことができるわけですから、競争力が出てくるわけです。こういうことができるかどうかという問題が提起されるわけです。少なくとも今までのように、ただ捨てるということではないということになりますから、企業にとっては産業廃棄物を出すということは、非常に重大な社会的行為になってくるということでもあります。

消費者 - 新しいライフスタイル それから、消費者はどうかというと、消費者は今までは使い勝

手がいいものを買うとか、あるいは格好のいいもの、機能性とかファッション性とか、あるいは値段の安さということを求めていたわけですが、今度は製品が過剰包装されていないかどうか、製品そのものがリサイクル性を持っているかどうかというようなことをチェックするようになります。というのは、今年東京都は10月1日から、ごみ袋を無色透明になさいました。大変英断をされたと思って敬服しているわけです。出すほうは大変だろうなと思うんですよ。大事な文書はうかつにそのままの形では出せない。破って捨て、コピーしたものは、それこそコピー処理機でもってだんごのような形にして捨てるとか工夫が要るでしょう。今までは、封筒や紙などを全くねじり棒みたいにしてボンボン捨てているわけ。ところが、これをきれいに切り刻んで押さえれば5分の1までは容積は減るわけですよ。その上にまた、はがきを切ったり何かして加工していくと、1袋に入れる効率が2倍にも3倍にもなってくる。それから、生ごみを出すときも、ぴしゃぴしゃとバケツの水を出すみたいにして出しているわけ、皆さんはね。これを、乾燥シタケみたいな状態にして、からからにして出せば、当然1袋に入る効率がいいわけです。こういう工夫を、きょうお集まりの皆さんはなさっているかどうかわかりませんがゴミ袋を1袋300円とか500円に値上げをすれば、必死になって考えるようになるでしょう。

つまり、我々は、消費者というのは、今まではけちと言われるのが嫌で、節約とか儉約というのが嫌だったんですけれども、これからはそういったごみ処理とか、リサイクルを考える上において、適正な等身大の生活が大切になる。今までの生活は、どちらかというと人のまねをして、あの人はあんな洋服着ている、あの人はあんな生活をしているから、私もそれに合わせようとしていた。シビルミニマムの時代には、最低限、そこにそろえようという考えだったのが、今ではシビルマキシマム、できるだけほかと合わせて、自分が最大のところまで行こうということばかりやるわけ。2等身倍、3等身倍の生活をしようとしている。

それがあから経済成長するんだという論理が

あります。しかしちょっと考えてみますと、アメリカやヨーロッパは、今経済的な困難になっているんですけども、供給サイドの工業投資の伸びはたったの1.4倍なんです。この20年間で。最終消費の伸びが、あんなに経済的不況の中にありながら1.8倍なんです。日本は2.4倍の工業投資の伸びと消費2.1倍なんです。この日本の経済は、どっちかという供給サイドが強くなって、需要サイドがあれだけ伸びたのにまだ弱いから、物価がまだ安定していたんです。ところが、ヨーロッパでは供給量を超えるぜいたくな生活を実はやっている。かつての先進国、帝国主義国ですからプライドもあるでしょう。ヨーロッパなんか見学すると、私から見ると博物館に行っているような感じがして、活力が全然ない。けども、生活だけは豊かにやろうとしている。これはいいですよ。文化的な意味において非常にいい。しかし経済的に見ると、実力もないのにあれだけの生活をしていると、私は言わざるを得ないのです。アメリカもそうです。ところが、それはどういうふうにはね返ってくるかという、リサイクル運動とか廃棄物処理運動で、消費者側から出てくるのです。消費者が自覚して、だからこそ消費者の生活防衛は自分たちがやらなくちゃいけないということで、市民社会の中では今猛烈な勢いでリサイクル運動と廃棄物の処理の運動が出ているのです。アメリカやヨーロッパが日本より進んでいるというんです。それは、意識的に進んでいる面もあるでしょう。しかし、経済的にそうせざるを得ないということもあるんだということを、消費者はよく生活を通してわかっているのではないかというふうに思います。

だから、日本人は今やバブルがはじめて、経済的不況に向かっていくときこそ、等身大の消費、自分がほんとうに、これだけのことならば自分たちの生活を支えられるんだという消費というものを考えていかなければならないんじゃないかと思えます。リサイクルとか廃棄物の処理プロセスを入れた場合には、そういう考え方が消費者に出てくる。このような消費者運動が、今どんどん起きているわけです。東京都の中でも、例えば私も何回か同うんですけれども、消費生活センターという

のがありまして、その消費生活センターなんかでは熱心に、きょうお集まりのような男の方があまり集まっていないんですね。もうちょっと生活者、子供を抱いて、育児のかたわら来られている。それらが僕は気になるような雰囲気の中で仕事をさせていただいている。そういう人たちは真剣に、お父さんの給料をどうして有効に使おうか、ご自分が働いている給料を何とかして有効に使いたいというふうに、生活主義的な形に変わってきているんですね。だから、そういう意味で、東京都はごみ処理が非常に難しいという中で、逆に東京都民はグリーン消費者といいますが、新しいライフスタイルを持った消費者への転換というものをやっていくのが、1つの都民の生きる道かなというふうに考えていると思います。

そして、もう一つは、今度はリサイクルのシステムですけれども、これも十分できていないわけですね。分別をするというところが1つの大きな問題です。分別排出というのは、消費者の責任です。企業は費用負担の責任はやりますけれども、消費者は分別排出しか今のところは責任が課せられていない。これがうまくいかないと、八王子の騒ぎみたいになります。結局最後はごみの有料制に踏み切らざるを得ないだろうというふうに思います。ごみの有料制というのは、現在の東京都の財政だとか、ごみ処理の処理場の不足だとか考えれば、もう火を見るより明らかじゃないか。つまり、住民税とか事業税とか、そういうのは傾斜配分で所得の再分配的機能的なものがあるだろうし、過大な財産を持っている人が財産を取られるということも、しょうがないんじゃないかというふう思っているのです。しかし森林なんかの税金のために全部切らなきゃなくなるのは不当だと思えますから、相続税の対象物件はきちっと定めなければならんとは思いますが、税制の機能の中で、もし環境税だとかごみ処理をするならば、やはり自分の得ている受益、あるいは自分の排出しているごみ量に応じた、そういった迷惑量に応じた費用負担をしなければならんのではないかという考え方が出てくるでしょう。そこまで考えていった場合には、当然ライフスタイルも、単なる

観念論でなくて、自分たちの生活の現場を通してライフスタイルで自然に優しいリサイクルのシステムに変えていくことが求められることになるでしょう。

社会的システム — 動脈的価格と静脈的価格 分別された後において、今必要なのは、公共的に集められたものについての公共的な処理システムです。もう一つ必要なのは、メーカーが売りっ放しにしているものに対して、ワンウエーの容器だとか、あるいはペットボトルとか、そういったようなもの、一方的なものを、逆にメーカーに投げ返すというシステムも必要なのです。例えば味の素がオイルを売ったらば、そのオイルの缶からに廃油を入れて小売や卸を通して戻したならば石けんが来るという、川崎の生活クラブ方式みたいなものがあるのもいいわけです。こんなことは企業はできないよと言っています、今は。しかし、ドイツではもう非常に過激ですからね、消費者が非常に強いですから、現在では2重価格制度。つまり、動脈部分、今まで私たちがマーケット原理で押さえていた商品の供給と需要というマーケット部分に加えて、バックヤード、あるいはフィードバックシステム、つまり使われた物が戻っていく、戻せるものは戻っていく、その戻っていくところをシステム化して、コストとして考えて価格に追加することをしています。つまり、これ1個を買ったときには、この製造原価のほかに、リサイクル原価を加えたものを価格として決定するのです。我々が電気料金を、現在100円の電気料金のうち20円を公害防止コストとして負担しています。自動的に、東京電力に対してです。これと同じ仕組みに価格をしたらいいのではないかということで、なかなかうまくいかないんですけれども、進んできております。

いわゆる動脈的な従来の市場の価格と静脈的な市場の価格がそろってくるわけです。そのときに、結局先ほど言いましたように、メーカーも今度は売りっ放しでなくて、自分の売ったものを回収して、自分が戻してくるというところまでを考えていかなければならない。それができない場合には、最終処理費についての社会的コストを負担すると

か、応分に負担するところまで行かないとならない。今の財政に対して一方的に一般消費者家庭に対する費用負担だけでごみ処理をしようというのは、もう間違ったシステムになっているわけです。つまり、企業が負担すべき部分というのもあるわけでありまして、それを負担してもらおうというシステムに変わっていかないと、いわゆるリサイクルシステムというのは解決しないわけです。個人のボランティアだとか、精神主義でもってそんなことやっていったって長続きしないわけです。やはり、社会的システムとしてきちんと自動的に我々が行動できるようなパターン、システムにしていかないとだめだろうということです。これは、私はだめだろうという、ゾルレンで言っているんですけれども、サインとしても、現実の問題としても、そういうふう処理していかざるを得なくなっているという、この2つの問題は緊急に重なって出てきているということでもあります。

物質循環的都市

結局、私たちの経済生活というのをまとめてみますと、この東京都の中でも、東京都に入ってくる資源、そしてそこで消費されて廃棄されるものとの関係において、我々の生活は成り立っているといえます。つまり、人間というのは自然から資源を取って、取った資源と全く同じ分量のものを産業廃棄物か一般廃棄物かリサイクルの廃棄物で吐き出しているということでもあります。経済成長をするなかで、萩原先生のグリーンGNPは僕は賛成です。このグリーンGNPというような考え方の中に、私は資本ストックを食いつぶした分についての補てんも必要ですけれども、少なくとも廃棄物として処理することができない部分についてのマイナスコストも考えていくべきでありましょう。結局、資源を取って、取った資源と同じ分量のものを廃棄物として戻すということ、つまり、この物質循環のシステムが、我々の経済のシステムであると考えられます。かつてのリサイクル時代は、廃棄物に対して、廃棄物全体が再生できるような形で戻っていったけれども、今は相当パーセント

が自然が再生できない形で戻している。このことが、ほんとうに生物や人類の将来にとってプラスなのか、マイナスなのかということを考える、その考えを持つということが今私たちに強く求められているわけです。私は、少なくとも環境破壊の原因の相当部分は、この分解不能な化学物質を自然に還元しているというシステムなりプロセスにあると思っております。したがって、これを処理するというためには、これからは材料を全部自然に優しいものにしなければならぬ。分解できるものにするというように徹底するか、あるいは分解できないものについては、分解して戻すということをしなければならぬ。これは少なくとも、我々が受け取った財産を次の世代に譲り渡して行く、継承する原則だと思うんですね。これを壊したまま残す権利は、私たちにはないということでございます。

経済へのエコロジー概念の導入 したがって、これまでの経済システムというのは、市場という貨幣的な合理性だけに成り立っていたんですけども、実質的な我々の生活の合理性という立場から見ると、この物質循環の実際の仕組みとマーケットの仕組みは完全に矛盾してきているわけです。しかし、人間である以上、この人間社会を秩序として維持していくためには、この市場機構を生かしながら、いかにして生態システムとの食い違いを人間として是正していくかということが、これからのパラダイム・シフト、つまり新しいエコノミーをエコロジーというコンセプトでもって、それをドライビングメディアといいますか、移行媒体として環境破壊的でない形のエコノミーのシステムに変えていくか、そのパラダイム変化、パラダイム・シフトというものを、今私たちは21世紀とその将来に対してやり始めているわけでありまして。我々の歴史的使命は何かといえば、我々が今まで得た、エンジョイした物質的豊かさというもののツケを、今度は将来に対して返していくということになります。そのためには、今私たちの生活の惰性を排除して、エコロジーを1つのメディアにして、新しいパラダイム・シフトを起こしていかなければならない状態に追い込まれているとい

うこと、これが非常に重要な点です。したがって、環境と対話する都市というのは何か。都市は非常に難しいということは、川口先生がおっしゃたとおりであります。同時にその難しさの中で私たちは考えていきたいと思うのは、この物質循環というものを、地域的にほんとうにコントロールしていくような、制御できるような都市というものを、つくるのが、自然と環境と対話できる都市なんではないかと思うのです。東京都はその都市になっていないわけでありましてから、これからその都市に向けて、これから都民のさまざまな工夫を自律的に組み合わせ、企業や消費者の協力を得なくてはならないと思います。そして、東京都は企業と消費者の運動を育てながら、エデュケーションという言葉も川口先生がおっしゃいましたが、そのエデュケーションということを考えて、市場と消費者のリサイクルシステムのできない部分、限界の部分を手助けして調整していくことが大切だと思います。ラグビーでいいますと、フォワードが企業であり、バックスがもし消費者であるとすれば、スタンドオフやナンバーエイトの立場で全体のチームプレーを調整するというのが行政の役割じゃないか。したがって、バックスはナンバーエイトが悪いから負けたんだということは言えない。前衛は前衛として全力を尽くさなきゃならないし、バックスはバックスとして全力を尽くさなきゃならないということなんですね。そしてよきコーディネーターが行政として機能することによって、初めて都市はいきいきとしたリサイクル都市になるということになるのではないかと思います。

リサイクル的都市 私は物質循環的な都市の把握ということと、物質循環的な都市の中での物質循環が自然に優しい、つまり先に述べたリサイクル的な都市になる工夫をみんなしていかなければならないといっているのです。それができなければ、この都市は放棄して、新たな都市をつくらなきゃならぬということにもなるかもしれないというぐらいに思っているわけです。そういうことを考えていくかいかないかということが、1つ大きな境目になるということです。物質循環論的な立場で、きょうは自然と対話できる都市というのは

どういふ都市なんだろうかということをお話したわけですね。規模が合わない、合うということはあると思います、大き過ぎちゃって。しかし特別区があって、少なくとも特別区の中でも、そういう考え方を持ってやれないだろうかということだと思います。そして、それができなければ、またさらに物質循環区をつくって、まとめていくということも必要だと思います。今の処理場にしても、焼却場にしても、こういう考え方ではなく、しょうがないからで、中には持ってきちゃ困るぞと言われて、つくらざるを得ないというような形になっていますけれども、それでは知恵がないですね。全体の物質の投入産出を押さえて、それで分析して、適正な選択をする必要があります。国家強制力で行うのではなくて、やっぱり市場の機能を使いながらやっていくわけですね。しかし、急いでやらないと間に合わないということだけは確かですから、1日1日を大事にして、これからリサイクル生活をどう立てるかということをやらなくてはならないなと思います。特に、消費者市民と企業の人たちの大きな理解と努力を求めていくことが大切と存じます。

【司会】 どうもありがとうございました。

福岡先生、川口先生、萩原先生、どうもありがとうございました。20年ほど前に、日本人は安全を空気や水と同じようにただだと思っているんじゃないかというような著作がイザヤ・ペンダサンという名前が出されました。しかし今日、日本人も、空気や水、つまり環境は有限なものだ、脆弱なものだということがわかってきました。でも、その環境、非常に複合的でまだまだよくわからない点も多いのですが、1人が自分の環境を考えて、また1人1人が環境と話し合っ、て、どういふ生きざまをしていくのか。そこから、「市民が環境と対話する」ことで、初めて「環境と対話する都市」ができてくる。つまり、都民が環境と対話しないと、東京都は環境と対話する都市にはならないという話で、最後に福岡先生が今日の全体をおまとめいただいたと思うんです。時間がなくて十分なお話ができなかったということですが、都市研究センターでは『総合都市研究』という、論文集を年3冊

出しているんですけども、そちらのほうに今日の講演も載せる予定でおりますので、またご興味のある方はご参照下さい。この総合都市研究は、東京都庁の都民資料頒布室に置いてございます。

それから、センターではもうひとつ、『都市研究叢書』というシリーズを日本評論社という出版社から出しているんですけども、そういう一般読者を対象としたものも出しております。

また、先ほど所長からご案内いただきましたけれども、来年4月から、大学院都市科学研究科というのをつくろうということで、今準備を進めております。この大学院は、昼と夜と、昼夜開講いたします。定員の約半数は社会人と考えておまして、仕事をしながら、もう少し高度な都市の専門家になろうというような方に、研究・教育の場を提供できるんじゃないかということで進めております。社会に開かれた都市研究・教育の場をつくってきたいと思っているのです。

きょうは、たくさんの方に公開講座に来ていただきまして、ほんとうにありがとうございました。これで、第6回の公開講座を終わらせていただきます。

—了—